

福岡市

野多目運動公園内遺跡調査報告書

野多目 扱渡 遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第93集

1 9 8 3

福岡市教育委員会

福岡市

野多目運動公園内遺跡調査報告書

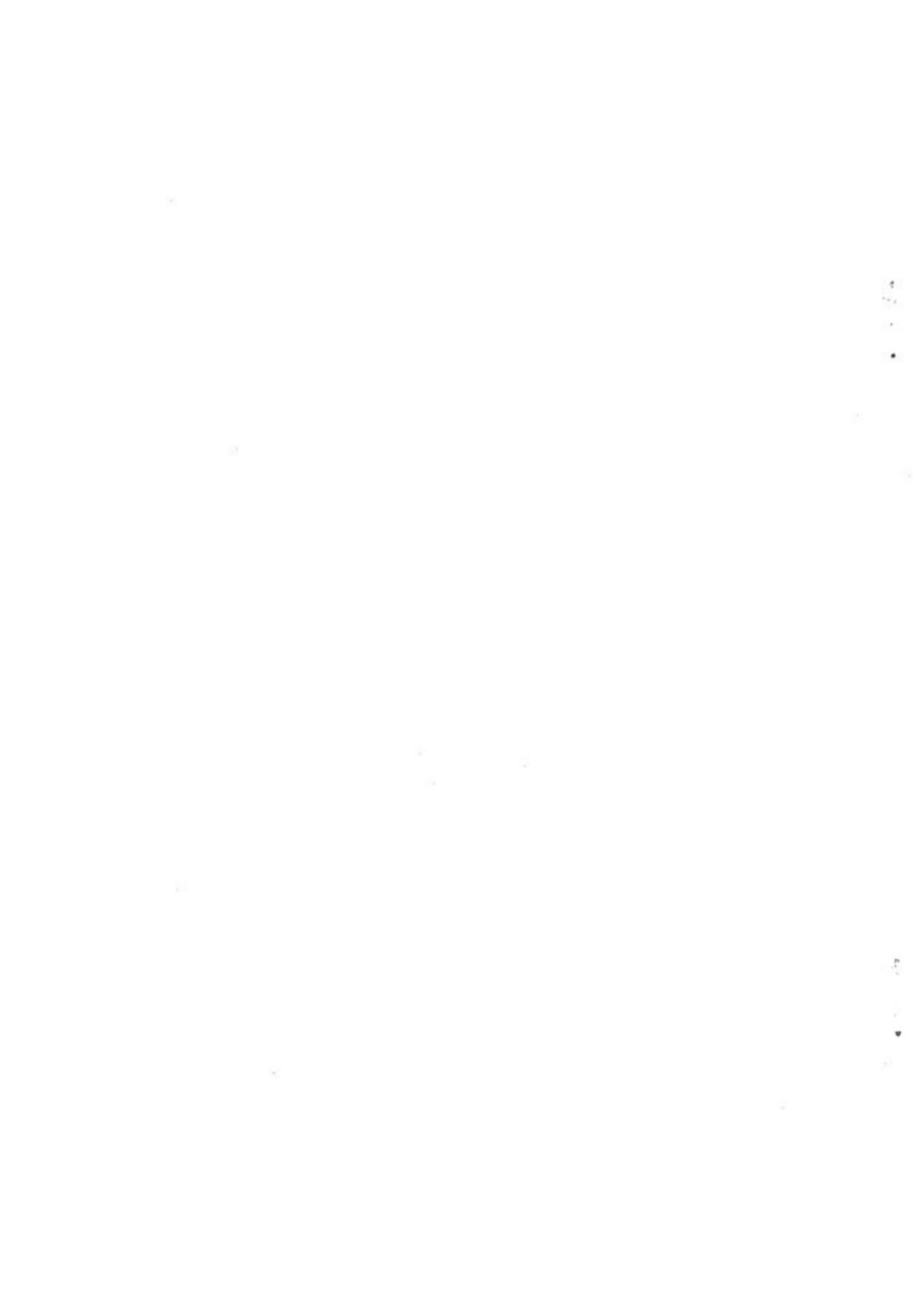
野多目 拙渡 遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第93集



1 9 8 3

福岡市教育委員会



序 文

福岡市南区に運動公園を建設する計画はかねてより進められていましたが、南区野多目に建設する計画が具体化され都市計画局の依頼を受けた福岡市教育委員会ではこれに先だって埋蔵文化財の調査を実施しました。

本書は55. 6月～55. 10月で一次、56. 8月～56. 10月二次の二ヶ年にかけて実施した発掘調査の成果を収録したものです。

報告書にみられるように類例の少ない縄文時代の貯蔵穴や古代の据立柱建物遺構など貴重な成果をあげることができました。

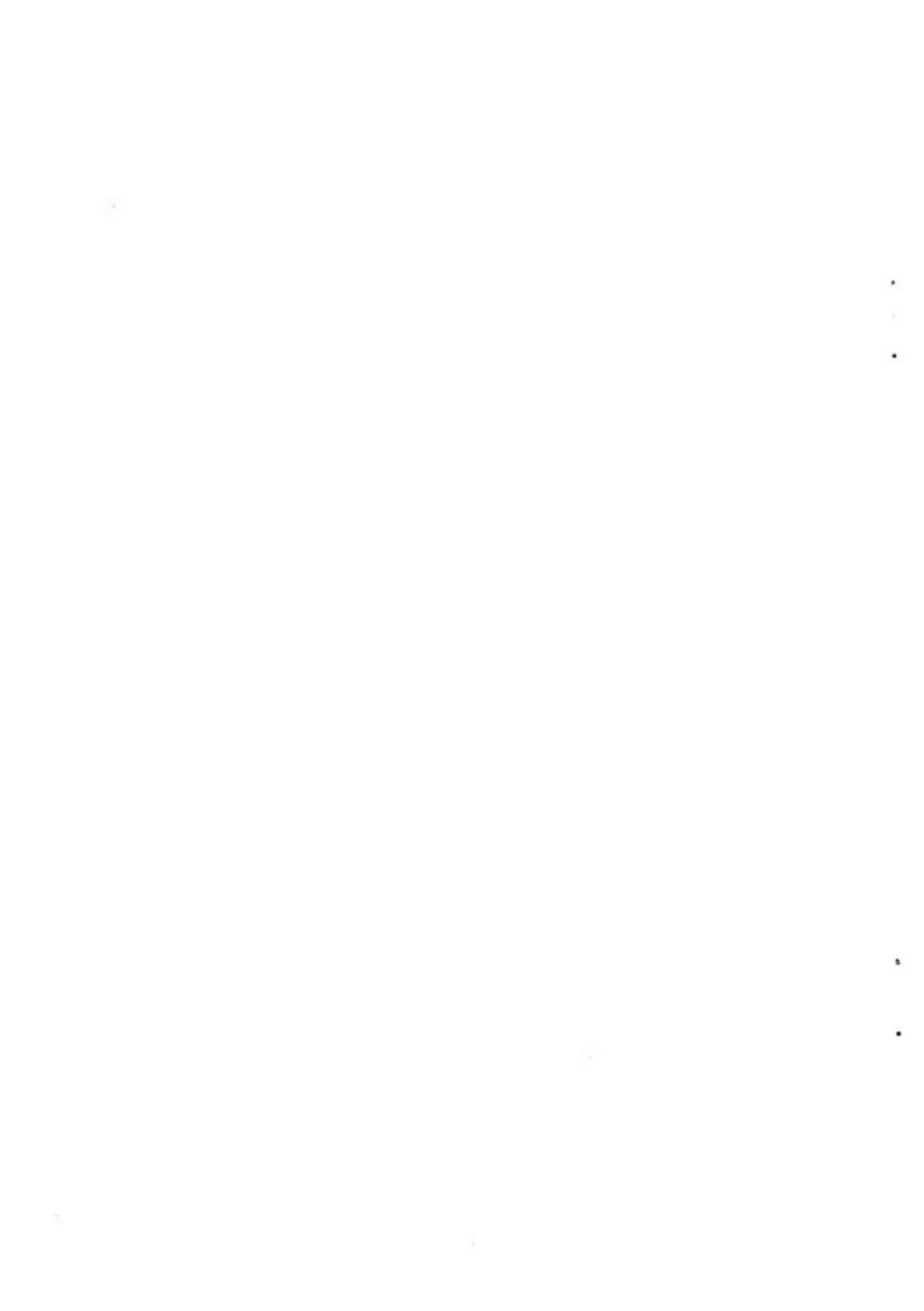
発掘調査から出土資料の整理に至るまでの多くの人々の御協力に対し心から感謝の意を表します。

本書が埋蔵文化財の理解と認識を深める一助となり合せて研究資料の一つとなれば幸いです。

昭和58年 3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美



本 文 目 次

第1章	序説	
1	はじめに	1
2	野多目括渡遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2章	調査概要	4
第3章	調査区の遺構と遺物	5
1.	旧石器時代の遺物	5
2.	縄文時代の遺構と遺物	7
(1)	第2号竪穴	8
(2)	第3号竪穴	10
(3)	第4号竪穴	13
(4)	第6号竪穴	14
(5)	第7号竪穴	15
(6)	第9号竪穴	16
(7)	第10号竪穴	16
(8)	第11号竪穴	18
(9)	第12号竪穴	22
(10)	第14号竪穴	24
(11)	第56号竪穴	28
(12)	第2号自然流路	29
(13)	客土層など出土遺物	29
3.	弥生時代の遺構と遺物	34
(1)	第61号竪穴（袋状竪穴）	34
(2)	第62号竪穴（袋状竪穴）	35
(3)	第25号住居址	36
(4)	溝状遺構	38
4.	古墳時代の遺構と遺物	39
(1)	第22号住居址	41
(2)	第23号住居址	42
(3)	表土層出土遺物	42
5.	古代の遺構と遺物	44
(1)	第6号掘立柱建物	46
(2)	その他の掘立柱建物	47
(3)	竪穴状遺構	49
(4)	溝状遺構	50
(5)	自然流路	50
第4章	総括	51
1	各竪穴出土の縄文土器について	51
2	中津式土器について	54
3	各時期の遺構について	62
4	おわりに	64

挿 図 目 次

第1図	野多目古渡遺跡と周辺の遺跡	
第2図	野多目古渡遺跡の位置と発掘区	2
第3図	野多目古渡遺跡の調査区と遺構全図（折り込み）	
第4図	旧石器時代石器実測図	
第5図	縄文時代遺構分布図	6
第6図	第2・3号竪穴実測図及び断面図	7
第7図	第2・3号竪穴出土土器実測図	9
第8図	第3号竪穴平面及び断面実測図	10
第9図	第4号竪穴実測図	11
第10図	第4・6・7・9号竪穴出土土器実測図	12
第11図	第6号竪穴実測図及び断面図	13
第12図	第7号竪穴・第1号溝実測図及び断面図	14
第13図	第9号竪穴実測図及び断面図	15
第14図	第10号竪穴実測図及び断面図	17
第15図	第10号竪穴出土土器実測図	18
第16図	第11号竪穴実測図及び断面図	19
第17図	第11号竪穴出土土器実測図	20
第18図	第12号竪穴実測図及び断面図	21
第19図	第12号竪穴出土土器実測図	23
第20図	第14号竪穴・第6号溝実測図及び断面図	25
第21図	第12・14号竪穴・第6号溝出土土器実測図	26
第22図	第56号竪穴実測図及び断面図	27
第23図	各竪穴出土石器実測図	28
第24図	客土層出土石器実測図（1）	30
第25図	客土層出土石器実測図（2）	32
第26図	弥生時代遺構分布図	33
第27図	第61号竪穴実測図	34
第28図	第62号竪穴実測図	35
第29図	第25号住居址実測図	36
第30図	弥生時代各遺構出土土器実測図	37
第31図	第6号溝出土石器実測図	38
第32図	古墳時代遺構分布図（折り込み）	
第33図	第22号住居址実測図	40
第34図	第22号住居址出土土器実測図	40
第35図	第23号住居址実測図	41
第36図	第23号住居址出土遺物実測図	42
第37図	古墳時代遺物実測図	43
第38図	古代遺構分布図及び第1号自然流路断面図（折り込み）	
第39図	第6号掘立柱建物実測図及び断面図	44
第40図	第1～5号掘立柱建物平面図	45
第41図	第7～12号掘立柱建物平面図	46
第42図	第13～18号掘立柱建物平面図	47
第43図	第19～24号掘立柱建物平面図	48
第44図	第1・8号竪穴実測図	49
第45図	古代土器実測図	50

図 版 目 次

- P L. 1 野多目拈渡遺跡周辺航空写真
P L. 2 野多目拈渡遺跡第1次調査全景（南西から、西から）
P L. 3 繩文時代窪穴分布状況（北から、東から）
P L. 4 (1)第7号窪穴断面
(2)第10号窪穴
P L. 5 (1)第11号窪穴出土土器出土状態
(2)第11号窪穴
P L. 6 (1)第12号窪穴断面
(2)第12号窪穴
P L. 7 各窪穴出土土器
8 第11号窪穴出土土器
9 第12号窪穴・第6号溝出土土器
10 客土層及び表土層出土遺物
P L. 11 (1)遺構分布状況（第2次調査）
(2)住居址分布状況
P L. 12 (1)遺構分布状況（第1次調査）
(2)掘立柱建物分布状況（南から）
P L. 13 (1)掘立柱建物分布状況
(2)第1・6号掘立柱建物
P L. 14 (1)第6号掘立柱建物
(2)第9号掘立柱建物
P L. 15 (1)第10・12・13号掘立柱建物分布状況
(2)第13号掘立柱建物

例 言

1. 本書は福岡市都市計画局公園緑地部公園建設課が計画した野多目運動公園建設に伴う遺跡確認調査として、教育委員会文化課が1980年6～11月、1981年8～10月の二次にわたって行った福岡市南区野多目に所在する野多目拈渡遺跡の調査報告書である。
2. 本書の執筆は、第3章2の一部を山中良之が、第4章1を田中、2を沢下孝信が行い、執筆者に関しては文末に記した。なお他の執筆・編集は山口謙治が行った。
3. 本書に使用した図の作成及び製図は、山口、松村道博、山中、沢下、松永幸男、浜石正子、上敷領久、岡部裕俊が行った。
4. 本書に使用した写真は、遺物を松村、山中が行い、他は山口が撮影したものである。



第1図 野多目古渡遺跡と周辺の遺跡

- | | | | |
|------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 野多目古渡遺跡 | 2. 野多目前田遺跡 | 3. 三宅B遺跡群 | 4. 和田A遺跡群 |
| 5. 花畠C遺跡群 | 6. 花畠B遺跡群 | 7. 四十塚古墳群 | 8. 大牟田遺跡群 |
| 9. 菅原郡遺跡群 | 10. 老司古墳 | 11. 老松神社古墳群 | |

第1章 序 説

1. はじめに

政令都市福岡の発展はめざましいものがある。こうした中で、文化施設、社会教育・社会体育施設の建設も続けられている。南区野多目に運動公園建設が計画されたのは、10年前にさかのぼる。1978年の第8回アジア競技大会を誘致すべく、主競技会場の候補地として野多目の国立ガンセンター用地があがった。

以後、野多目地区の人々にとって、運動公園建設が望まれた。こうした中で、1975年に公園建設が計画された。これに伴い、都市計画局公園緑地部公園建設課から、教育委員会文化課に、埋蔵文化財の有無についての依頼があった。これを受け、1978年文化課で現地踏査及び試掘を行った結果、縄文時代後期の貯蔵穴・古代の掘立柱建物が確認され、縄文時代から古代・中世にかけての集落址であることがわかった。この結果をもとにして、文化課と公園建設課と協議を重ね、遺構の検出面に影響が無いように盛土をして残すことになった。しかし遺構の上に盛土するとしても、永久的と考えられる運動場を含めた構造物が建設されるため、遺構の性格・分布状態を確認し、遺跡の性格・範囲をより明確化するために発掘調査を行うことになった。

調査は、1980年7月から11月にわたって第1次調査を、1981年7月から9月にかけて第2次調査を行った。調査にあたっては、公園建設課をはじめ、地元各位の多大なる協力をいたしました。記して感謝の意を表したい。

調査組織

調査委託者 福岡市都市計画局公園緑地部公園建設課

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係

事務担当 三宅安吉 古藤国雄 試掘担当 柳田純孝

調査担当 山口謙治（第1・2次） 松村道博（第2次）

調査協力者 鶴倉巳三郎、粉川紹平（大阪市立大学教授）、森醇一郎（佐賀県立博物館）、山本輝雄（九州大学助手）、木村幾多郎（九州大学助手）、後藤直（福岡市歴史資料館）、田中良之（九州大学助手）、副島邦弘（福岡県文化課）

調査補助員 浜石正子、岡部裕俊（同志社大学）、沢下孝信・松永幸男・上敷顕久（九州大学）、釜振耐美（京都女子大学）、村上かおり（福岡大学）

整理補助員 友田妙子、茅島洋子、井本賀都子



第2図 野多目沾波遺跡の位置と発掘区（1／5000）

2. 野多目古渡遺跡の位置と周辺の遺跡

野多目古渡遺跡は、福岡平野の南西部で、地籍は福岡市南区大字野多日字古渡に位置している。本遺跡名は、大字と字からとった遺跡名とした。本遺跡の東600mには北流する那珂川があり、西はじょじょに高くなり油山山系となっている。地形的には、那珂川町南畠を源とする那珂川の河岸段丘上に位置している。この段丘は、段丘疊層の上に八女粘土（ローム）層・鳥栖ローム層・新期ローム層・腐蝕土層をのせている。段丘上でも本遺跡の調査区は、標高15m前後で微高地となっている。調査までは、一部が畑地で、大部分は水田であった。

本遺跡をとりまく歴史環境は、旧石器時代より始まり現代に至っている。福岡平野で山石器時代の包含層が確認されたのは、博多JX諸岡遺跡・諸岡館跡遺跡・南区柏原遺跡・早良区有田遺跡と少ない。本遺跡で新期ローム層中から三陵尖頭器が出土し、包含層が確認された。本遺跡周辺では、野多目前田遺跡・日佐遺跡群などでナイフ形石器などが採集されている。

縄文時代の遺物が出土している遺跡も少なかったが、本遺跡の西3.5kmに位置する柏原遺跡では、縄文時代早期から晩期の各時期の遺物が構造から出土している。本遺跡では、貯蔵穴などの遺構から後期の遺物が出土し、同期の遺跡としては、市内では、西区飯盛遺跡・早良区有田遺跡・東区蒲田水元遺跡などがある。周辺の遺跡として、前述の柏原遺跡のほかに、那珂川町深原遺跡・春日市門田遺跡・柏田遺跡・南区老司池畔遺跡・野多目前田遺跡などがある。

弥生時代の遺跡は、福岡平野を中心にいたる所に大遺跡が分布しているが、那珂川西岸の本遺跡周辺は、他地域に比べて調査例が少ないといえよう。本遺跡では、貯蔵穴などの遺構が確認された。周辺の遺跡としては、那珂川東岸の須玖丘陵に須玖岡本遺跡群・日佐原遺跡・門田遺跡など大遺跡が分布している。一方那珂川西岸地域では、南大橋遺跡（龜塚墓）・本遺跡の北1kmに位置する和田遺跡などがある。

古墳時代になると背振・油山山系の裾部は古墳築造の場となっている。本遺跡の南々西1kmに老司古墳・卯内尺古墳があり、南1kmには老松神社古墳群が、西300mには野多日古墳群がある。那珂川を上流に向って多くの前方後円墳などの古墳が、本遺跡西方の油山山系には多くの古墳群が分布している。本遺跡では、多くの住居址が確認され、居住地として本遺跡周辺が使われていたと考えられる。

古代になると、北へ1kmの三宅小学校横に筑紫官家のものと考えられる礎石があり、字図をみると八ノ坪、四ノ坪などの小字があり条里もひかれていたと考えられる。本遺跡では掘立柱建物などの遺構が確認された。周辺の遺跡としては、三宅庵寺や老司瓦窯址などがある。

中世になると、各地で比較的大きな造成工事が行われたと考えられる。本遺跡でも12・13世紀の青磁が少量出土している。この段階で本遺跡周辺は水田化され現在にいたっているとも考えられる。現代の集落は本遺跡内の微高地に位置している。

第2章 調査概要

発掘調査は1980年7月から11月、1981年8月から10月の二年次に渡って行なった。第1次調査は、6月から8月まで晴天は10日前後という状態で、発掘作業は進まなかった。

調査は、公園造成の工程に合わせる形で行なった。調査対象面積は12070m²である。前述したように本遺跡は、盛土を行ない残すことが大前提となっているので、遺構の分布・時期・性格を確認し、遺跡の性格を明らかにすることを目的として行なった。

調査方法は、対象地域内を可能なかぎり確認するために、15cm前後の耕作土（部分的には60cm前後の盛土がしてあった）を重機を使用して除去することから始めた。次にスコップ、鍬、草搔き、移植ゴテなどを使用して遺構を確認して、石灰で遺構の輪郭を描き、写真撮影を行なった。次に、磁北に合わせて10mの方眼を組み実測を行なった。さらに遺構の性格をつかむために、堅穴17基・掘立柱建物1棟・堅穴住居址3基と溝状遺構・自然流路についてはトレンチを入れて調査を行なった。掘り上げた遺構については、写真撮影を行い、実測を行なった後、川砂で埋め戻した。調査確認面積は、二年次で8870m²である。以下概要を記す。

本遺跡は、公園造成のために買取される前は、調査区北東部の一部を除いて水田として利用されていた。土層は、表土が現代水田耕土で、下に暗褐色から黒褐色の粘質土が5cm前後堆積しており、その下が新期ローム層・鳥栖ローム・八女粘土層となっている。暗褐色から黒褐色粘質土中には多量の縄文時代後期の单一時期の遺物が入っていたが、この層の上面で検出できる遺構はなくトレンチを入れて除去したところ厚さ5cm前後で、地山であるローム層がでてき、さらにローム層との間に古代の遺物が一面にでてきた所から、中世以降の客土と考えられる。遺構はローム層を掘り込んでいる。地山の地形は、北東部の一画が高く、南へ傾斜しているが、本遺跡周辺の地形をみると南西から北東に向ってゆっくり傾斜をもっている。

本遺跡の最も古い段階の遺物は旧石器時代の遺物であるが、時期決定できる資料は未掘のためつかめなかった。縄文時代の遺構としては、後期の貯蔵穴50基・溝状遺構1条・自然流路1条を確認し、貯蔵穴12基について精査した。縄文時代の遺構は調査区西岸に片寄る傾向がある。

弥生時代の遺構は溝状遺構1条（2条？）・袋状堅穴2基・住居址1基を確認しただけであるが、調査区北東部に片寄っており、分布と同じくする古墳時代の遺構の下に密集していると考えられる。古墳時代の遺構として、住居址63基を確認したが、弥生時代の住居址も含まれていると考えられる。古墳時代の住居址は、調査区の北東部と南部に片寄っている。

古代の遺構としては、柱穴と思われる小堅穴多数・堅穴（土塙墓も含む）39基・溝状遺構6条・自然流路2条を確認した。掘立柱建物は24棟確認し、1棟について精査した。

・以下、調査知見について、古い時代から述していくことにする。



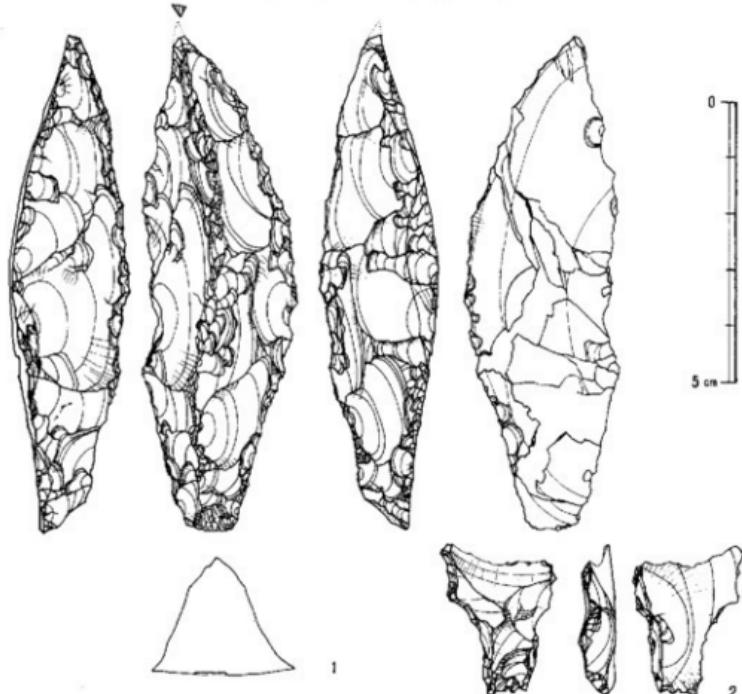
第3図 野多日拓溝遺跡の調査区と遺構全図

第3章 調査区の遺構と遺物

1. 旧石器時代の遺物（第4図）

本遺跡では、調査区の東北部を中心に新期ローム層が堆積している。1は、第二次調査中の遺構確認中に主要剝離面の一部があらわれ取り上げたものである。良質の黒曜石の厚い横長の剥片を素材としたもので、主要剝離面から角度のある剝離加工を加え断面三角形に整形した一点突頭器である。さらに上腹部に上半部は右から、下半部は左から調整加工を加えている。重さは34.4gである。2は黒曜石製の不定形の剥片を素材とした台形石器で打面と素材先端部に刃済し加工を加えている。重さは2.1gである。1・2の共伴関係はわからないが、いずれにしてもナイフ形石器文化期のものであろう。

今後、周辺地域で良好な包含状態の遺跡の調査に期待したい。



第4図 旧石器時代石器実測図

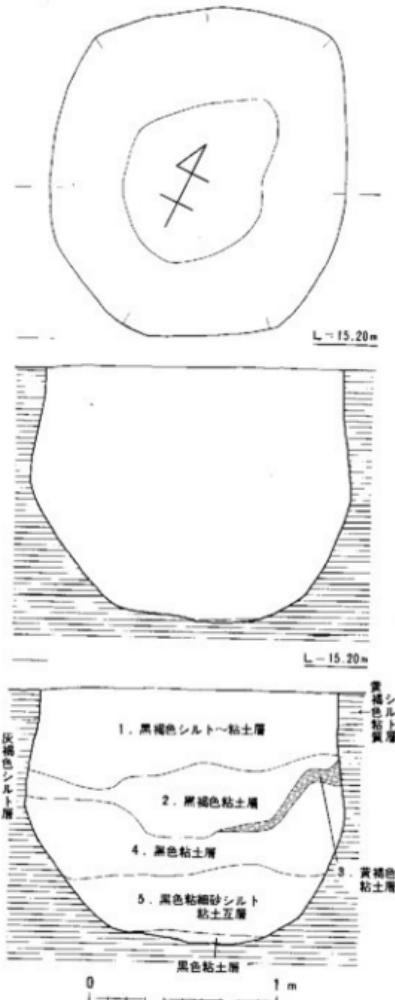
凡 例

K 壑 穴

D 溝状遺構

2. 繩文時代の遺構と出土遺物

繩文時代の遺構としては、堅穴50基・溝状遺構1条・自然流路1条を確認した。堅穴遺構は50基確認したが、あくまでプラン確認であり、平面における覆土の観察から同期のものとしたが、後世の遺構を見まちがえたものもあるし、古代の遺構としたものに繩文時代の遺構が含まれている可能性もある。ただ繩文時代の堅穴遺構は、調査区内では、50基前後でおさまるものと考えられる。遺構の分布状態としては、第5図でみると、調査区の西に第2号自然流路に沿った形で分布している。また堅穴は第2~4・6・7・9~14・56号の12基について精査した結果、いずれも後期の遺物が出土し、イチイガシ・タデなどの種子が多量に出土したことがあること、床面に同種の種子が密着していることから、イチイガシを土体とした種子の貯蔵用として繩文時代後期に掘られ使用された貯蔵穴といえる。堅穴は、第17号など5基・第2号など5基・第3号など5基・第14号など13基・第36号など8基・第44号など8基・第56号など3基・第58号と8ヶ所の集中区がみられる。第2号自然流路(川)は北部の表面で、古代の遺物が入っているが、第27号堅穴の北側に10×9mのトレンチを入れたところ密着の遺物は、繩文時代中期末から後期であること、夜白・板付I式土器までを含む第5・6号溝に切られていることなどから、堅穴(貯蔵穴)とほぼ同時期の川と考えられる。第7号溝については、第20・27号堅穴を切っているが、床面密着の土器が、後期



第6図 第2号堅穴実測図及び断面図

の土器であり、第2号川と切り合い関係が観察できなかったので、縄文時代後期の遺構とした。

以下精査した遺構について記していくことにする。

(1) 第2号窓穴(第6・7・23図)

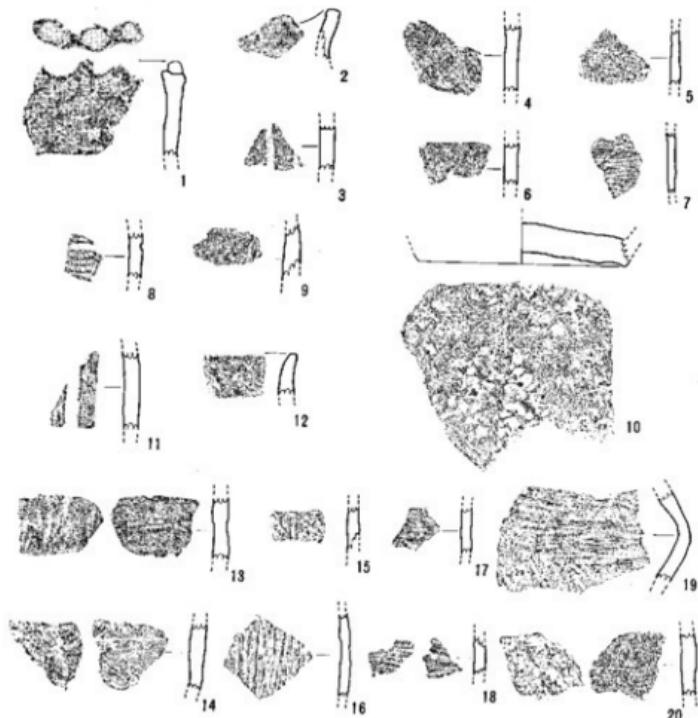
本窓穴は、 $1.5m \times 1.6m$ の隅丸方形の平面プランをもつ窓穴で、深さは $1.5m$ で少し袋状を呈している。窓穴は、黄褐色の鳥居層から八女粘土層まで掘られている。堆積土層は、黒色から黒褐色のシルトから粘土層で、自然堆積と考えられる。(山口)

出土土器(第7図1~20) 1~2は、黄褐色を呈する粗製土器で、出土層は不明である。前者は、砂粒とともに金雲母・滑石粉末を含み、器表にわずかに二枚貝による条痕を残す以外は内外ともよくナデされている。後者は、波状口縁をなすと思われ、砂粒を多く含む。内外ともナデ調整を施す。これらのうち、後者は系統を特定しえないが、前者は、胎土・口唇部の刻日からみて、明らかに阿高式系の粗製土器である。

3~7は1層出土の土器である。3は、赤褐色を呈し滑石粉末を混入したもので、内外ともナデ調整を施す。凹線文を有するが、凹線の巾は狭くかつ浅い。4~5は、ともに黄褐色を呈する粗製土器の胴部片で、砂粒を多く含み、ナデ調整を施す。6は、黄褐色を呈して、内外ともよくナデであり、胎土中に滑石粉末を混入する。7は、黄褐色を呈する粗製土器胴部片で、内面はナデ仕上げを行うが、外面には二枚貝による条痕を残している。これら3~7のうち、3は坂の下I式の精製土器、6は阿高式系土器の胴部と認定しうるが、他はその系統を特定しえない。

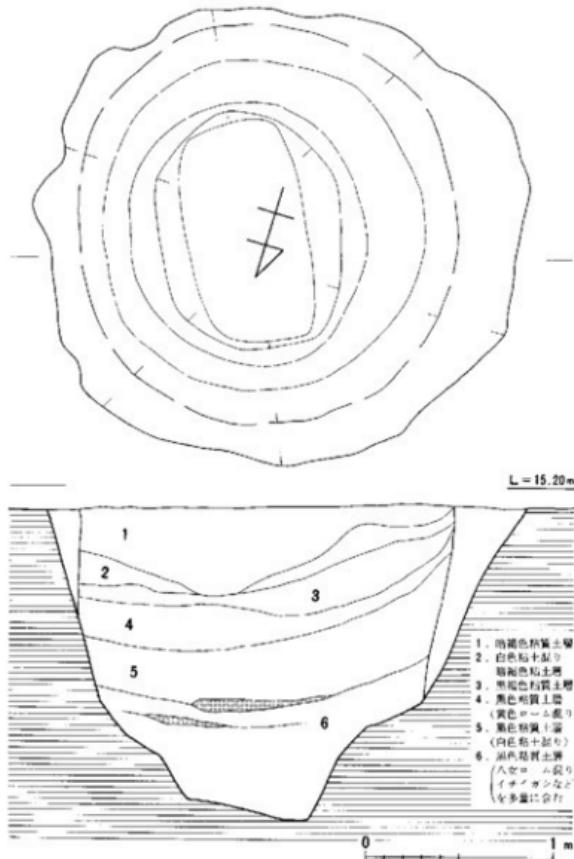
8~12・19は、2層出土の土器である。まず8は、器表にはヘナタリによる擬縄文を有し、内面はナデ仕上げを行った黄褐色を呈する土器で、黒・金雲母を多く含む。9は、黄褐色を呈する粗製土器胴部で、内外とも磨滅が著しい。1~2mm大の砂粒を多く含む。10~11は、ともに赤褐色を呈し胎土に滑石粉末を混入する。10は、底部で、外面に鱗骨製土器製作台の圧痕をわずかに残す。11は全体をナデ仕上げし、凹線文を施した精製品であるが、凹線の幅は比較的狭く断面V字形をなす。12は、黄褐色を呈する粗製土器口縁部で、砂粒とともに黒・金雲母を多く含み、内外ともナデ調整を行なっている。以上、8~12・19のうち、8は明らかに中津式の精製土器に比定しうる。また、11は坂の下I式の精製土器、10も阿高式系土器の胴部と認定しうるが、他の系統は定かでない。

13~15は4層出土の土器である。いずれも黄褐色を呈し、前二者は胎土中に金雲母を含んでいる。13は、内外とも幅3~5mmの粗雑な研磨痕を有するが、内面には一部巻貝(ヘナタリ属のものとされている)による調整痕を残している。14は、内面を二枚貝調整の後にナデしており、外面はナデ仕上げている。15は、内面はナデ、外面は剥離のため調整は不明である。これら3点のうち、系統を特定しうるのは中津式の特徴の一つである巻貝条痕をもった13のみである。



第 7 図 第 2・3 号縫穴出土器実測図

最後に、16～18・
20に示したものは
5～6層から検出
された上器である。
いずれも黄褐色を
呈し、16は、内面
ナデ、外面は幅広
の放射肋をもった
二枚貝によって調
整している。また、
17は、内面ナデ、
外面研磨の精製品
で沈線文を有す。
18は、内外ともに
二枚貝調整を施し、
20は、外面は剥落
して調整痕はうか
がえないものの、
内面は二枚貝調整
の後にナデ仕上げ
を行なっている。
そして、これら4
点のうち17は中津
式であるといえよ
うが、他の3点の
系統は特定しえな
い。



第8図 第3号堅穴平面及び断面実測図

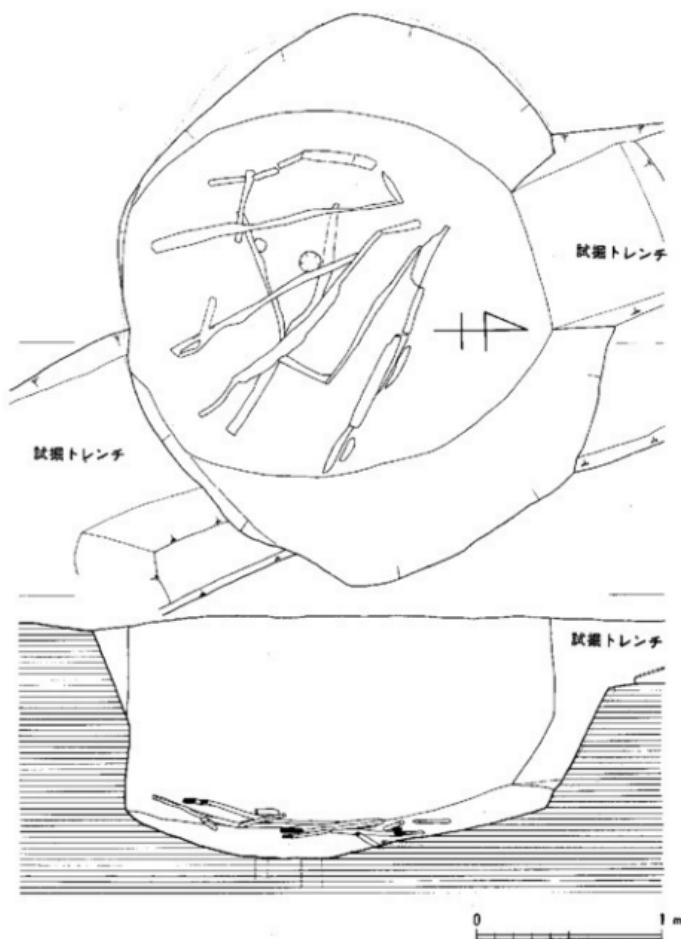
(田中良之)

出土石器（第23図、8） 玄武岩の扁平な礫に同一方向から表裏に剥離加工を加えた後、さら
に粗雑な二次加工を加えて刃部を作り出した打製石斧である。重さ205.5 g。

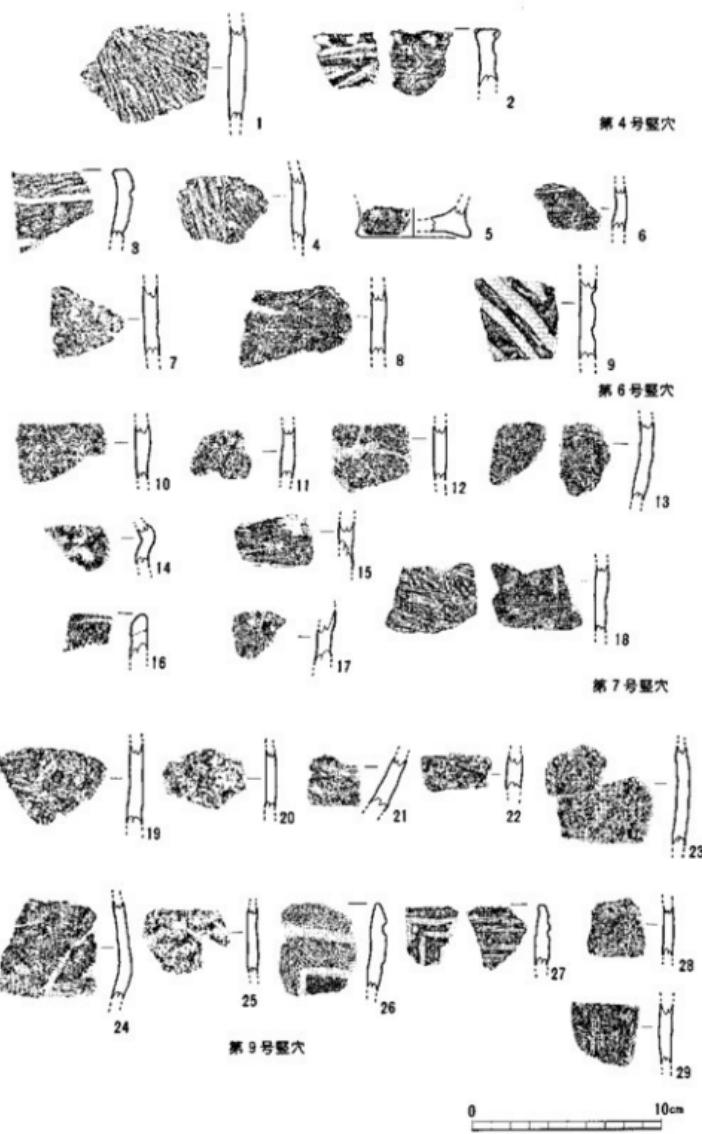
（2） 第3号堅穴（第7・8図）

堅穴の中でも第4・10号堅穴とともに比較的大きな堅穴で第4・10号堅穴の間に位置している。
平面プランは、上場が径2mの円形で下場が1.6m×0.5mの長方形を呈し、深さは1.6mである。

本堅穴は、鳥栖ローム層から八女粘土層、さらに砂質土層(含水層)まで掘られている。堆積土層は、黒色から暗褐色の粘質土層で、第2層のようにローム層が堆積しているが、壁面の崩落層と考えられ、自然堆積と思われる。なお、第6層上面から床面にかけて多量のイチイガシの種子やタデの種子などの種子が含まれていた。ちなみにイチイガシは、皮だけで果肉は残っ



第9図 第4号堅穴実測図



第10圖 第4・6・7・9号竪穴出土土器尖測図

ていない。 (山口)

出土土器（第7図21） 第3号堅穴からは21が1点のみ検出されている。底部付近を欠くものの、完形に近い。内傾した口縁をもつ鉢形の器形で、口縁部4ヶ所に隆起をもつが、そのうち2ヶ所は環状の把手をなしていた可能性がある。胎土中に滑石粉末を多量に混入した阿高式系の土器で、赤褐色を呈する。内面はユビケズリの後ナデしており、外面はケズリ痕をナデで消している。(田中)

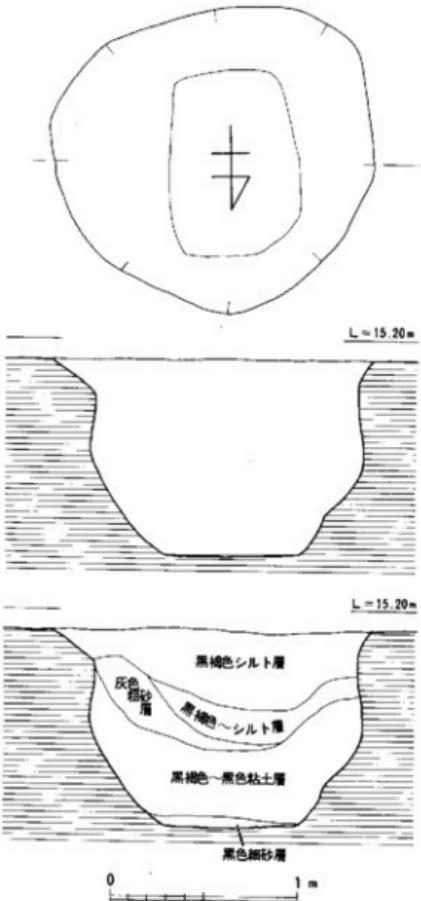
(3) 第4号堅穴(第9図)

本堅穴は、試掘調査中に確認された堅穴で平面形は、2.5mの円形で、深さ1.3mである。堆積土層は、黒色から暗褐色の粘土層で自然堆積と思われる。本堅穴の床面直上には、径5m前後の半萩木が一面に出土し、床面には杭穴（柱穴？）2個が確認された。また青灰色粘質土（八女粘土）の床面には、少量のイチイガシがくい込んだ形で出土した。(山口)

出土土器（第10図1・2） いずれも下層の出土で黄褐色を呈する。1は、外面を卷貝調整、内面をナデ調整した中津式の粗製土器で、胎土には金雲母を含む。2は回線文を有する阿高式系土器であるが、口縁端の凹点は稍突化し、凹線も狭く浅いV字形をなして、金・黒雲母とともに砂粒を多く含む。坂の下II式に相当するとと思われるが、質が悪い。(田中)

出土石器 本堅穴からは、黒曜石・古銅輝石安山岩製の削片が少量出土した。

以上の遺物のほか、イチイガシなどの少量の種子が出土した。



第11図 第6号堅穴実測図及び断面図

(4) 第6号竪穴(第10・11・23図)

本竪穴は、径1.5mの円形プランをもつ竪穴で、深さは1mで風呂釜状を呈している。なお、床面は、ほぼ水平で50×100cmの長方形プランである。本竪穴も鳥栖ローム層から八女粘土層まで掘られている。堆積土層は黒褐色から黒色のシルトから細砂層である。

(山口)

出土土器(第10図3~9) 3は、1層出土で黄褐色を呈し、ヘナタリによる擬繩文を有し、内外ともナデ仕上げを施した中津式の精製土器である。

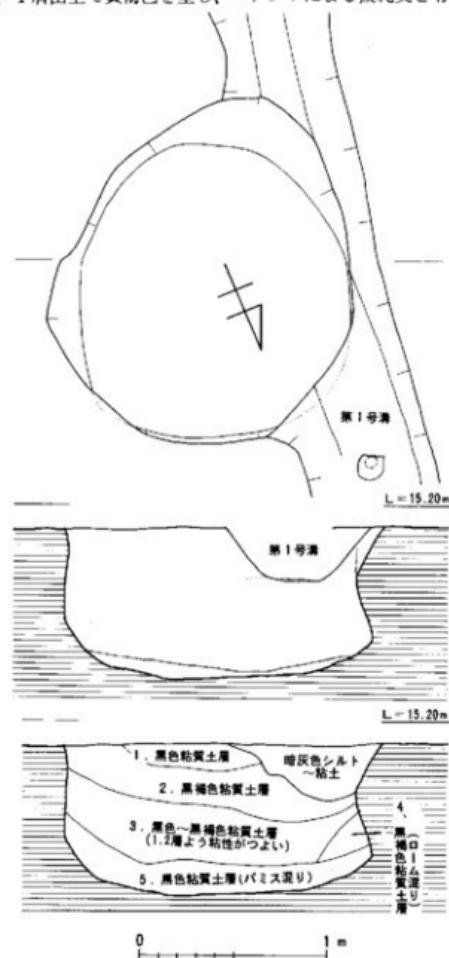
4~6は2層からの出土品で、いずれも黄褐色を呈する。4は、内面ナデ、外面は巻貝による調整の後にナデしており、5は、内外ともナデで、胎土中に金雲母を含む。6は、内面はナデ、外面は粗雑な研磨による調整を行なっている。これらのうち、4は中津式の粗製土器、5も中津式の、おそらくは精製土器の底部と思われる。

7~8は3層の出土で、前者は、黄褐色を呈し、砂粒・金雲母を多く含んで、内外ともにナデ調整を行なう。後者は、赤褐色を呈し胎土中に滑石粉末を混入する阿高式系土器で、内外ともにナデ仕上げている。

9は、4~5層の出土で、赤褐色を呈し胎土中には滑石粉末を混入する。凹線文を施すが、凹線は断面V字形で幅もやや狭い。坂の下1式の精製土器胸部片と思われる。

(田中)

出土石器(第23図5) 第2層



第12図 第7号竪穴・第1号溝火窯図及び断面図

から出土した古銅輝石安山岩製の削器である。

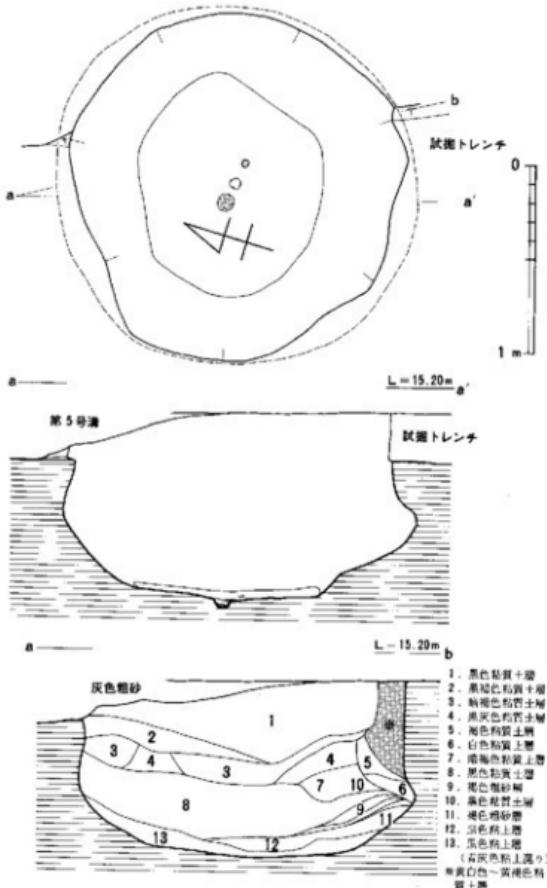
(5) 第7号窓穴 (第10・12・23図)

本窓穴は第3・4号窓穴の東に位置する窓穴で、古代のU字溝（第1号溝）に切られている。平面は1.6mの円形プランで、深さは80cmである。床面はほぼ平面で、床面直上が最も広くなっている。堆積土層は黒褐色から黒色の粘土層で自然堆積と考えられる。（山口）

出土土器（第10図10～18） 10・11は出土層不明で、いずれも内外面をナデ調整し黄褐色を呈するが、前者は胎土中に滑石粉末を混入した阿高式系土器である。

12～15は2層の出土品である。12は、内外ともにナデ調整で、赤褐色を呈し、胎土に滑石粉末を混入する。13～15は黄褐色を呈し、13の外面は磨耗して調整痕は不明であるが、内面は巻貝調整の後にナデしている。14は内外ともに磨滅しており、15は内外ともに二枚貝調整の後にナデしている。なお、13の胎土中には金雲母が含まれている。これら2層出土土器のうち、系統を特定しうるのは、阿高式系の12と中津式と思われる13のみである。

さて、16～18は3～5層出土の上器である。いずれも黄褐色を呈する小片で、16・17は内外ともにナデ調整を施す。18は、



第13図 第9号窓穴実測図及び断面図

黒・金雲母を多く含んだ粗製土器で、内外ともに巻貝調整を施し、内面はその後にナデしている。またこれらの系統は、中津式と思われる13のみに特定しうる。

(田中)

出土石器（第23図1） 古銅輝石安山岩製の有齒鎌で、横剥ぎの剝片を素材として、表裏とも入念な剝離加工が加えられている。重さ13.3g。

(山口)

第8号堅穴出土上器（第10図19～23） いずれも土層は不明で、保存も悪い。19・20は黄褐色を呈し、器面内外ともにナデしている。また20の胎土には黒・金雲母を含んでいる。21は、器表は磨滅して調整痕は不明であるが、胎土中に滑石粉末を混入する阿高式系土器である。22・23は、いずれも黄褐色を呈し、内外ともにナデ、後者の胎土には金雲母を含んでいる。（田中）

（6）第9号堅穴（第10・13図）

本堅穴は試掘調査中に確認された堅穴で、第4号堅穴の北に位置し、弥生時代初頭の第5号溝に北側を切られている。本堅穴は、径1.7mの円形プランをもち、深さ1mである。床面は、ほぼ平らで、床面から40cm上が最も広くなっている。床面中央部に径10cm、6cm、4cmの落ち込みがあり、中央部の落ち込みの中には杭と考えられる木片が残っていた。堆積土層は、暗褐色から黒色の粘質土で、粗砂（第9・11層）や壁の崩落と考えられる白色粘質土（第6層）をはさんでいることから自然堆積と考えられる。

(山口)

出土上器（第10図） 24・25は、ともに黄褐色を呈し胎土に黒・金雲母を含み、ナデ調整を行なっているが、25の外表面は剥落のため観察しえない。出土層は不明である。

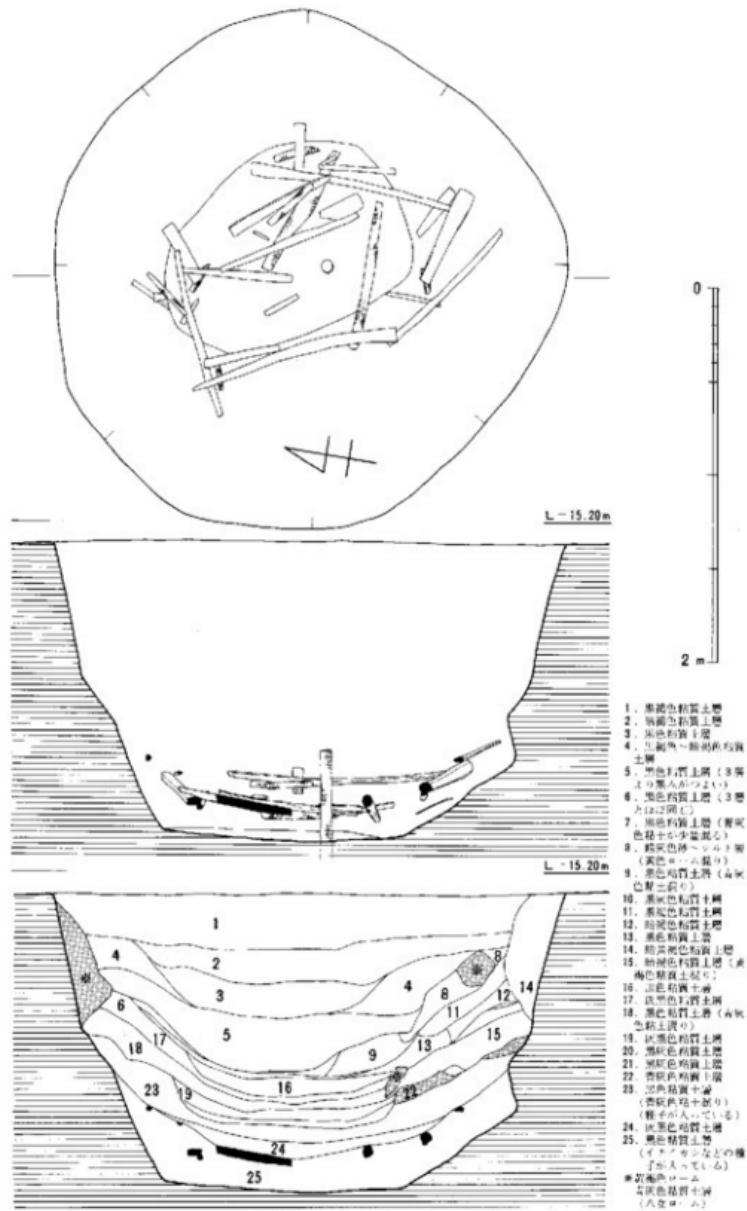
26～29は下層出土の上器である。まず、26は、黄褐色を呈し、胎土に黒・金雲母を含む磨消繩文土器で、内外ともにナデ仕上げを行なっている。27は、赤褐色を呈し胎土に滑石粉末を混入しており、外表面はナデ、内表面は二枚貝調整の後にナデを施す沈線文土器である。そして28は、黄褐色を呈し、砂粒を多く混じえたもので内外ともナデ調整。29は赤褐色を呈し滑石粉末を混入しており、内外ともにナデしている。また、これらのうち、中津式である26と坂の下II式である27、さらに、明らかに阿高式系である29の3点は系統が特定できる。（田中）

（7）第10号堅穴（第14・15図）

本堅穴は、第3号堅穴の北に位置する比較的大形の堅穴で、1.7mの円形プランをもち深さ1.6mである。鳥居ローム層・八女粘土層を掘り、さらに含水層の砂層まで掘られている。床面は平らで鉢形にひらいている。本堅穴の床面中央部には径6cmの柱が、床面から50cm残っており、床面から10cm上には径6cm前後、長さ80cm前後の丸太材や割り材、半裁木などが出土し、その下から床面までは、多量のイチイガシと少量のタデなどの種子がぎっしりとつまっていた。

堆積土層は、黒色から灰黒色・暗褐色の粘質土からシルト層で、ローム・ローム泥リシルト層・砂層をはさんでいることから自然堆積と考えられる。

(山口)



第14図 第10号堅穴実測図及び断面図

出土土器（第15図） 1は、黄褐色を呈し器面は内外ともに磨滅する。2は、金雲母を多く含んでおり、器表にはススが付着する。内面はナデである。3・4は、黄褐色を呈し滑石粉末を混入する阿高式系の土器で、内外ともにナデ調整を行なう。5は、赤褐色を呈し滑石粉末を混入した坂の下II式土器で、1～3mmの砂粒を多く含んでおり、浅い凹線文を有する。1層の出土である。6は、5層の出土で、黄褐色を呈し、内外ともにナデ調整を施す。7は、赤褐色を呈し滑石粉末を混入した坂の下I式土器で、狭く浅い凹線文を有する。10層出土。8は、15層の出土で、暗黄褐色を呈し、内外ともナデ。浅い凹線文を有する胴部片で、坂の下I式と思われる。9は、暗黄褐色を呈し、多量の砂粒と金・黒雲母を含んでいる。内外ともナデで、21層の出土。10は、赤褐色を呈し滑石粉末を混入した坂の下I式土器で、凹線は断面U字形だが浅い。内外ともナデで23層の出土である。

（田中）

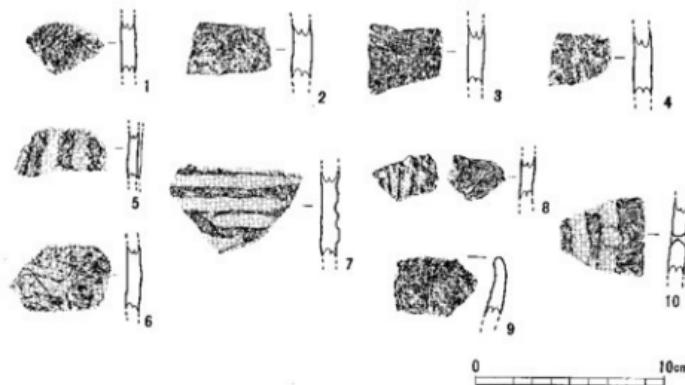
（8）第11号竪穴（第16・17・23図）

本竪穴は、試掘調査中に確認されたもので、第5・6号溝間に位置している平面円形の竪穴である。径2.1m、深さ1.2mで、鳥栖ローム層から八女粘土層まで掘られている。床面はほぼ平らで、床面には、イチイガシの種子がくい込んだ形であった。本竪穴は、ほかの竪穴より多くの土器を包含していた。

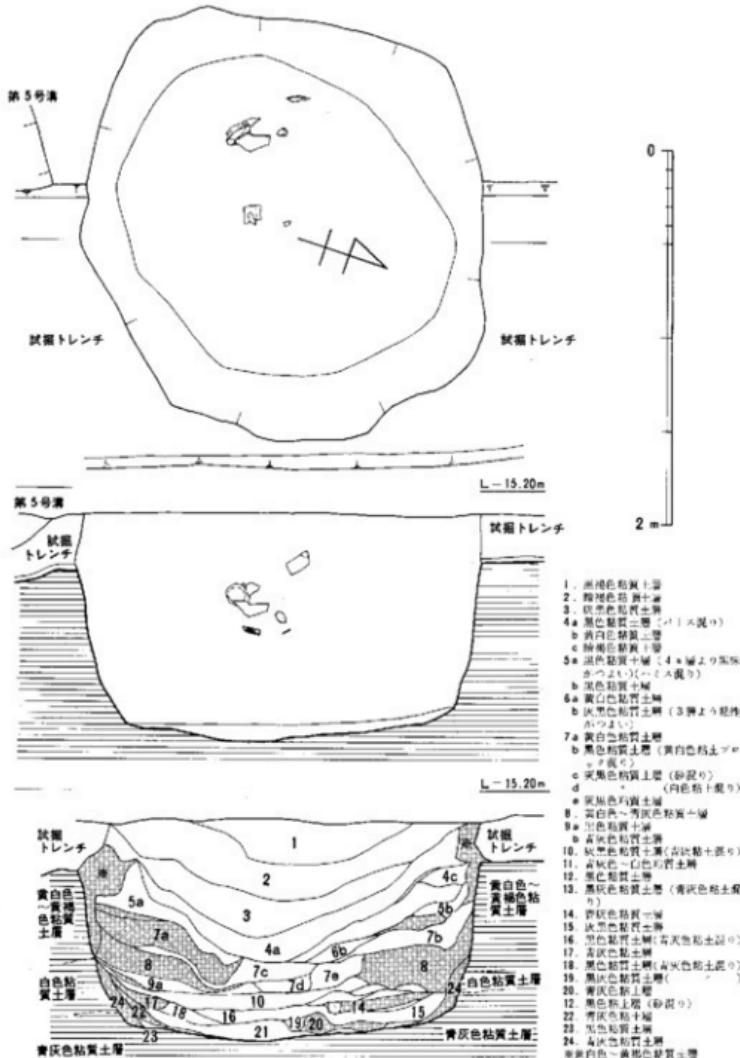
堆積土層は、暗褐色から黒色の粘質土で、第4層から下は互層に近い形で、ロームをはさんでいる。自然堆積と考えられる。

（山口）

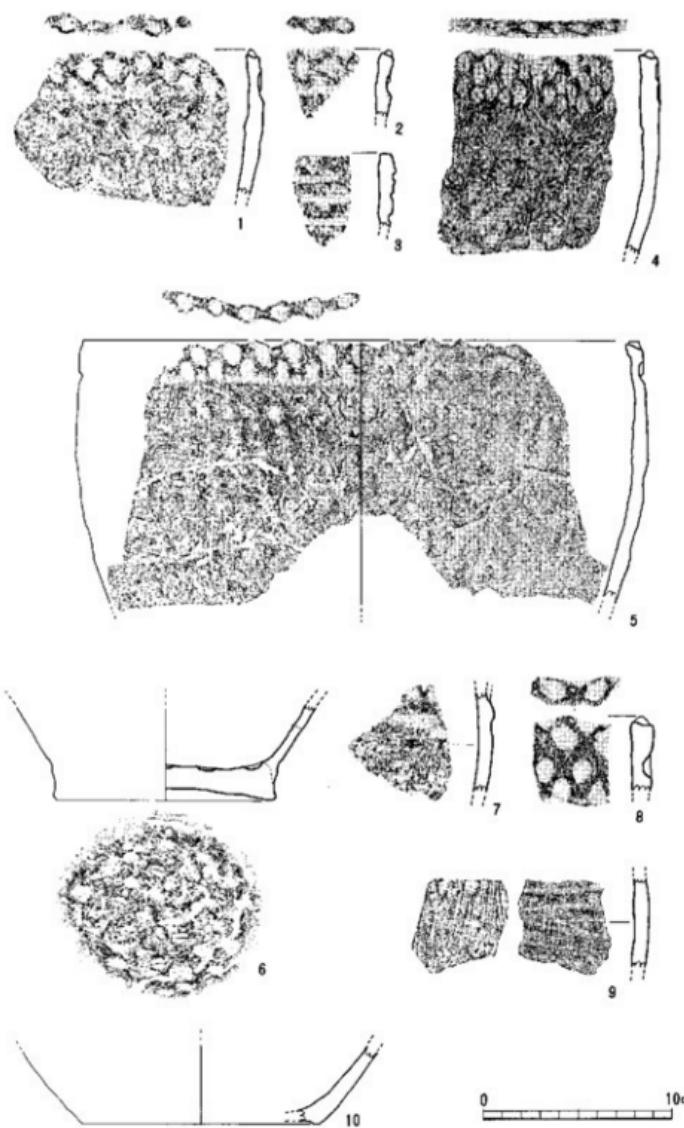
出土土器（第17図） 1・2は、1層の出土で、暗赤褐色を呈する阿高式系土器で、ともに浅い凹点文を有するが、2には滑石粉末を混入しておらず、色調も1に比して明るい。また、1の



第15図 第10号竪穴出土土器実測図



第16図 第11号井穴実測図及び断面図



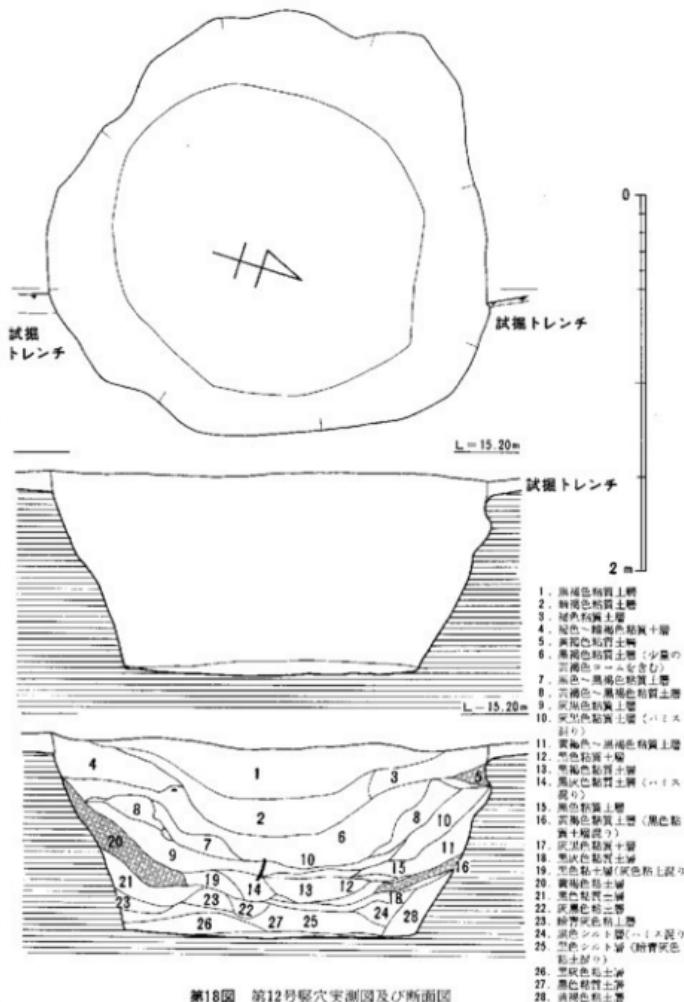
第17圖 第11号竖穴出土工具実測図

凹点文は2段目の方が浅く不明瞭である。両者とも磨滅のため器面調整は観察しえない。

3は、内外とも剥離していて不明瞭ではあるが、凹線文を有する坂の下式土器である。2層の出土で、黄褐色を呈し、細かい砂粒をやや多く含む。

4・5は、3層の出土で、凹点文を施した阿高式系土器である。4

は、黒褐色



第18図 第12号堅穴実測図及び断面図

を呈し、内外ともナデ仕上げを行なった上器で、凹点は小さくかつ浅い。5は、暗赤褐色を呈し、内外ともナデを施す。凹点は、1段目に比べて2段目の方が小さく浅いが、4の凹点のような凹点中央の粘土のたまりはみられない。

6は、6層出土の底部で、二枚貝調整を施してナデた後の内面に、ヘラによる凹点文を加えて

いる。外面はナデ調整で、胎土には砂粒が多い。

7～9は7層出土で、いずれも阿高式系の土器である。7は、赤褐色を呈し、内外面とも剥離して不明瞭ではあるものの、浅い凹線文を有する阿高田式と考えられる。8は、赤褐色を呈し滑石粉末を混入する凹点文土器で、内外ともにナデ調整を行なう。9も、胎土に滑石粉末を混入した土器で、内外とも二枚貝調整の後ナデを施す。

10は、9層の出上で、暗黄褐色を呈し内外をナデ仕上げした底部片である。 (田中)

出土石器 (第23図4) 黒曜石製の縦長剝片の縁辺に刃こぼれがみられる。このほかに少量の削片などが出土している。また本堅穴出土上の礫と第2号堅穴出土上の礫が接合した。

(9) 第12号堅穴 (第18・19・21・23図)

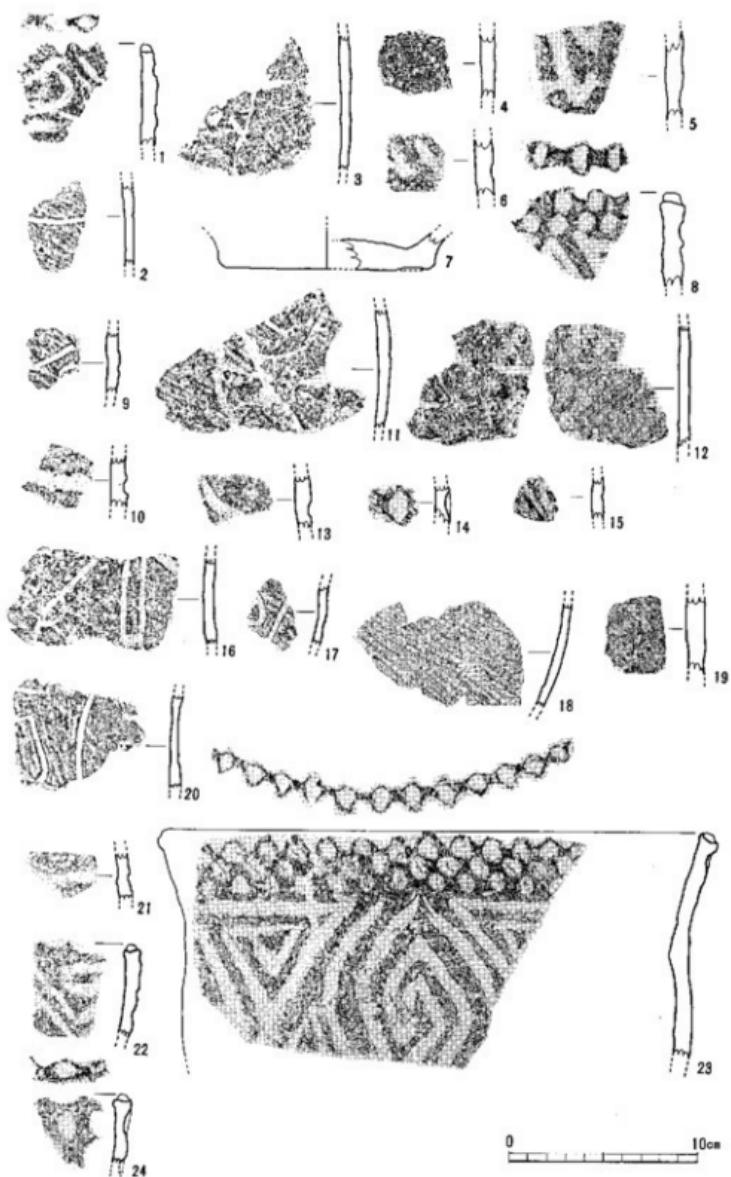
本堅穴は、試掘調査によって確認された堅穴で、第2号自然流路のそばに位置し、第28号堅穴を切っている。径2m強の円形プランをもつ、深さ1mの堅穴で、床面は平らで、風呂釜状の形をしている。床面には、イチイガシの種子がくい込んでいた。本堅穴も、第11号堅穴同様比較的多くの土器を包含している。堆積土層は、黒色から灰黒色・暗褐色の粘質土層で、壁の崩落と考えられるロームをはさんでおり自然堆積と考えられる。 (山口)

出土土器 (第19図・21図1～10) 1は、出土層は不明であるが、暗赤褐色を呈し滑石粉末を混入する阿高田式土器で、凹線は浅く、内外ともにナデ調整を施す。

3は、赤褐色で胎土に滑石粉末を混入する阿高式系土器である。内外ともナデしており、2層の出土。

2・4～8は、1～4層の出土である。2は、黄褐色を呈し砂粒を多く含んだ薄手の土器で、内面はナデ、外面は巻貝調整の後に沈線文を施している。4～6は、滑石粉末を混入した土器で、いずれも内外をナデしている。4は黄褐色を呈し砂粒を多く混じるが、5・6は赤褐色を呈する。また、5の凹線は断面V字形を呈する。7は、黄褐色を呈する底部片で、内外ともナデしている。8は、赤褐色で滑石粉末を混入する土器で、砂粒も多く含む。凹点は小ぶりで浅く、凹線も浅い断面V字形を呈する。これら1～4層出土土器のうちその系統が判別しうるのは、中津式半精製土器(2)・坂の下I式(5・8)・坂の下II式(6)と後二者のいずれかである阿高式系土器(3・4)である。

さて、9～14に示したのは6層出土の土器である。まず、9は、内外をナデした黄褐色を呈する沈線文土器で、砂粒を多く含んでいる。10は、黄褐色の凹線文土器で、内外ともにナデ調整を施し、胎土には滑石粉末と金・黒雲母を含む。11は、黄褐色を呈する沈線文土器である。内面は剥落しており、外面は巻貝調整の後ナデしている。本来は繩文を有していたかも知れないが、器表の磨滅著しく、観察しえなかった。12は、黄褐色を呈する胴部片で、外面はナデ、内面も二枚貝調整の後ナデを施す。13は、赤褐色を呈し滑石粉末を混入した凹線文土器で、内外とも



第19圖 第12號墓出土土器實測圖

ナデ。14は、暗赤褐色の凹点文土器で、多くの砂粒と金・黒雲母を含んでいる。以上の6層出土土器のうち、9・11は中津式の半精製土器、10・13・14は坂の下I式もしくはII式と認定する。

次に、16～24に示したのは9層出土の土器である。16は、黄褐色を呈する磨消繩文土器で、内面はナデ仕上げを行なっている。17も黒褐色を呈し、16と同様な沈線文を有するが、繩文はもたない。18は、灰褐色の粗製土器胴部片で、内面は二枚貝調整の後ナデ、外側は巻貝条痕を施す。砂粒を多く含み、器表の一部にススの付着が認められる。19は、金雲母を多く含んだ黄褐色の土器で、内面はナデ、外側にはススが付着している。20は、磨消繩文土器である。繩文は細かく、内面はよく研磨している。暗黄褐色を呈し、黒雲母・砂粒を多く含む。21～23は凹線文土器で、21は、暗赤褐色で滑石粉末を混入しており、内外ともナデ調整を施す。22は、暗い茶褐色を呈し、内面はナデ、外側は剥離している。23は、暗赤褐色を呈し、滑石・金雲母を少量含んだ比較的大きな破片で、2段の凹点文の下にワラビ手と人組満文を複合させたモチーフを描いている。しかし、凹点は、断面U字形をなすものの中間に粘土のたまりが認められ、全体の配列も乱れている。また、凹線も、断面コ字形かV字形を呈する浅いもので、モチーフも直線化が著しい。調整は、外側の口縁部付近はナデしているが、その下はケズリのまま放置し、内面は板目による調整の後ナデしている。24は、暗褐色を呈し金雲母を若干含んだ土器で、2段の凹点文を施す。内外ともにナデしており、2段目の凹点は浅い。

以上に述べてきた9層出土の土器は、系統別にみて、中津式の精製土器(16・20)・半精製土器(17)・粗製土器(18)・阿高III式(22)・坂の下I式(23)・坂の下II式もしくはII式(21・24)と認定される。

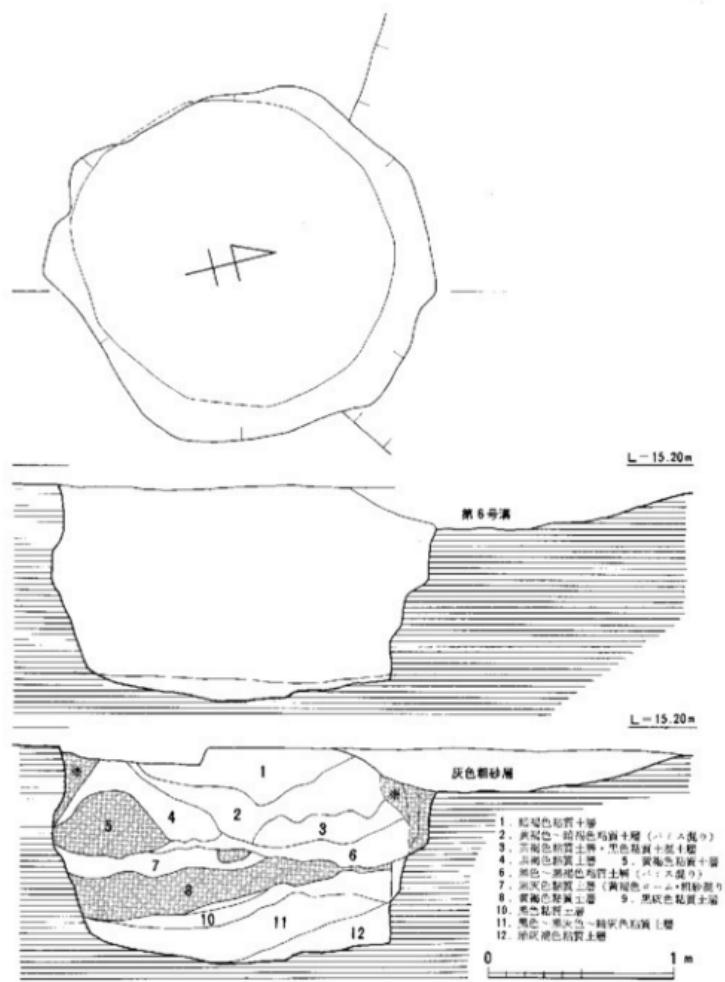
15は、11層の出土で、黄褐色を呈する小片である。

さて、第21図1～10に示したのは下層出土の土器である。いずれも赤褐色～暗赤褐色を呈し、胎土中に滑石粉末を混入した阿高式系土器である。1は、内外ともナデ調整で、断面U字形の浅い凹線文を施す。2も、内外ナデ調整で、凹線・凹点ともに小ぶりで浅い。3・4は、ともに浅い凹線文を施し、内外をナデた土器で、5は、内外をナデた後、小ぶりで浅い断面U字形の凹点文を施している。6は、口縁部が内傾する粗製土器で、内面はナデ、外側は二枚貝調整の後ナデしており、7～10も同様な胴部片である。これらの凹線文・凹点文土器は坂の下I式土器に相当するものであり、他の破片もおそらくは同様であろう。(田中)

出土石器(第23図2・3) 2・3とも黒曜石製の縦長剝片で、2は先端部を折った後、表から裏にかけて二次加工を加えている。3は先端部及び縁辺に二次加工を加えている。ほかに黒曜石製削片や古銅輝石安山岩製の剝片・削片が出土している。

(10) 第14号堅穴(第20・21・23図)

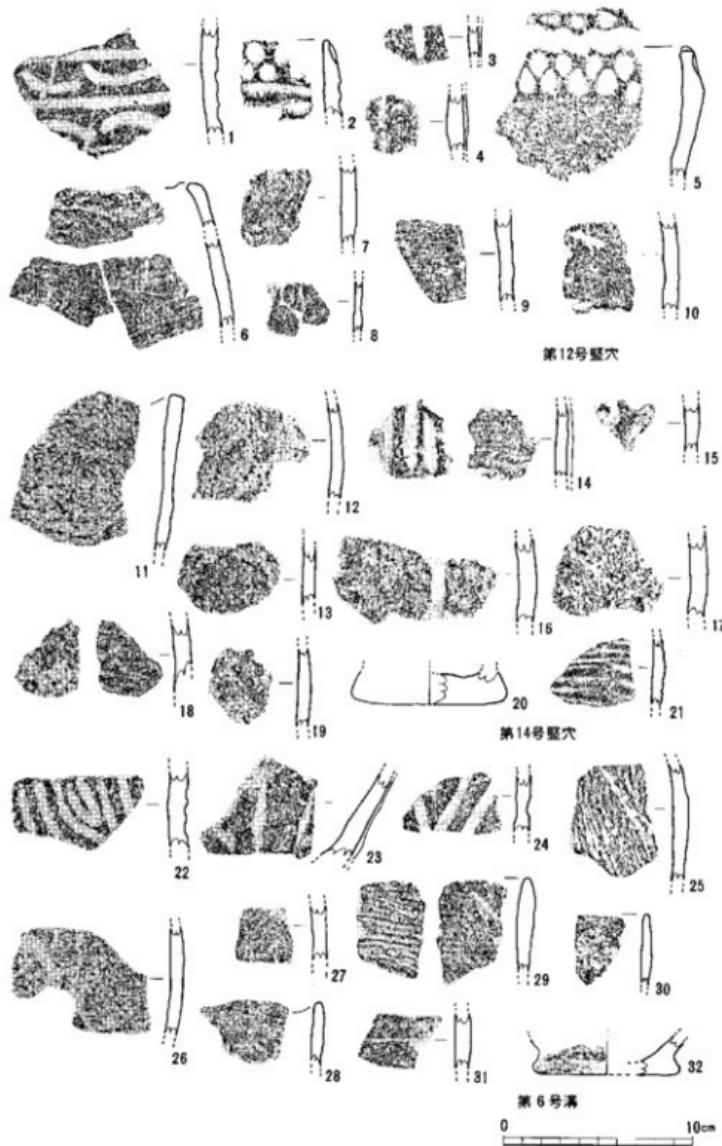
本堅穴は第2号自然流路の近く、第11号堅穴の西に位置する堅穴で、第6号溝に北側を切ら



第20図 第14号豊穴・第6号溝実測図及び断面図

れている。径1.9mの円形プランをもち、鳥栖ローム層から八女粘土層まで掘り込まれており、深さは1.15mである。凹んでいる床面にはイチイガシの種子がくい込んでいた。

堆積土層は、暗褐色から黒灰色・黒色の粘質土層であるが、第8層（黄褐色粘質土）の上面



第21図 第12・14号竖穴・第6号溝出土土器実測図

がほぼ平らになっ
ているところから
埋められた可能性
がある。一方床面
近くには、再堆積
のロームがたまっ
ており壁の崩落が
はげしかったこと
がわかる。（山口）
出土土器（第21図
11～21） 11・12

は1層の出土で、
ともに黄褐色を呈
し、剥離・磨滅し
ている。11は胎土
中に滑石粉末を混
入する阿高式系土
器である。

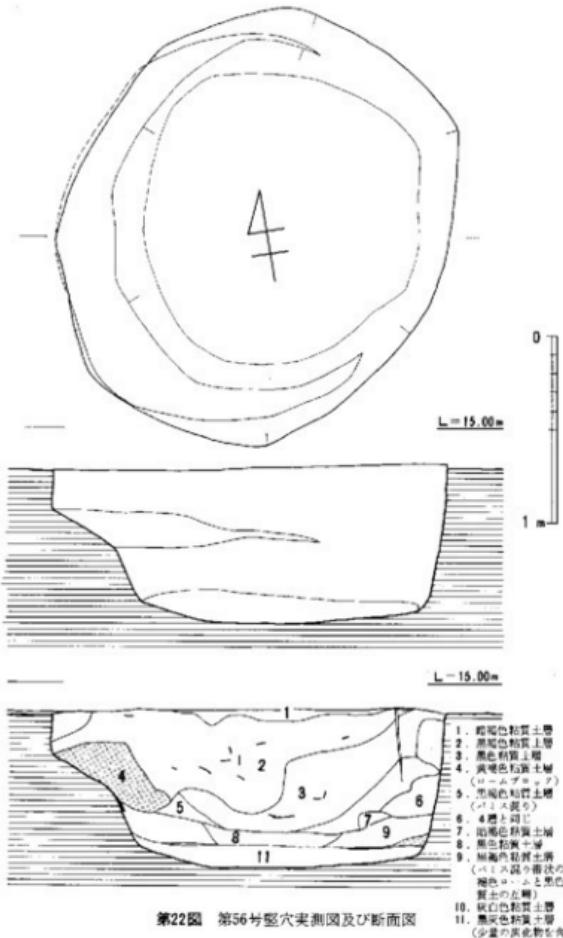
13は、1～3層
出土で、黄褐色を
呈し滑石粉末を混
入した阿高式系土
器である。内外と
もナデ調整を施す。

14は、黄褐色を
呈し滑石粉末を混
入した4層出土の

板の下I式土器で、断面U字形の浅い凹線文を有する。外面はナデ、内面は二枚貝調整の後ナ
デしている。

16・17は、6～7層の出土で、ともに赤褐色を呈し滑石粉末を混入した阿高式系土器で、内
外ともナデしている。

18～20は、7層出土で、いずれも黄褐色を呈し、内面はナデ、外面は剥離している。18の胎
土には金・黒雲母を含んでいる。



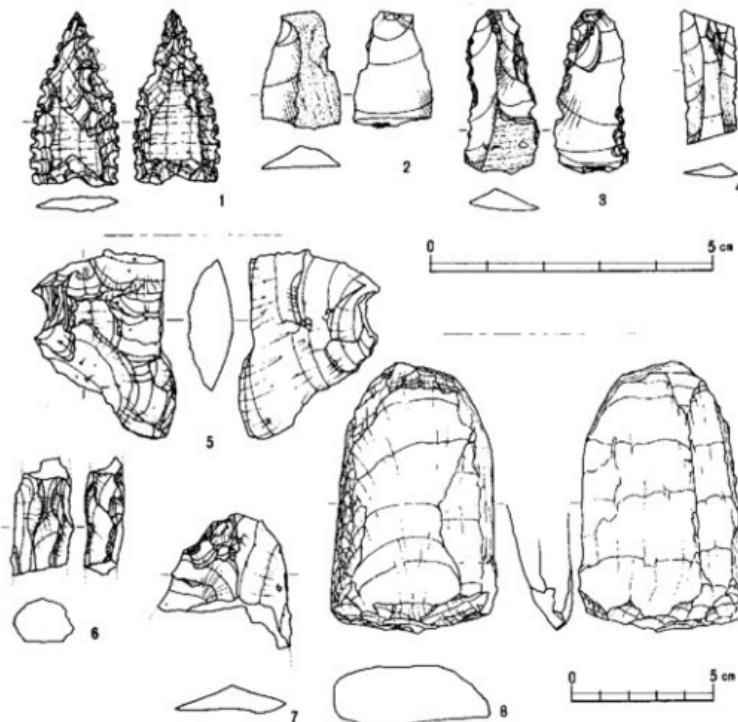
第22図 第56号堅穴実測図及び断面図

21は、暗黄褐色を呈する小片で、金・黒雲母を含み、内面はナデ、外面は二枚貝調整の後ナデしている。
(田中)

出土石器（第23図6） 古剣輝石安山岩製の横剥ぎの剥片を素材として、比較的角度のある二次加工を加えている。搔器か。ほかには、黒曜石製・古銅輝石安山岩製の剥片・削片などがある。

(11) 第56号竪穴（第22図）

本竪穴は、第2次調査中に確認したもので、調査区北西部に位置し、西側を第6号溝に切られている。本竪穴の上場は径2mの円形プランをもち、深さは85cmで中間点に段がある。床面は径1.5mの円形で、ほぼ平らである。八女粘土層まで掘り込まれており、床面には少量のイチイガシの種子が埋まっているが、第11層中にはイチイガシを含んでいないところから、第3・



第23図 各竪穴出土石器実測図

10号堅穴以外の堅穴と同様イチイガシを取り上げた後埋まったと考えられる。

堆積土層は、暗褐色・灰黒色・黒色の粘質土で、ロームやロームブロックをはさんでいることから自然堆積と考えられる。

出土遺物 本堅穴からも比較的多く土器が出土した。しかし土器は歎弱なものが多い。

滑石粉末を胎土に混入する土器は、口縁部片が2片で、底部が4点あるほかはいずれも胸部破片である。口縁部は刻目をもち、口縁直下には数段の凹点文をもつていて。胸部破片は、やや広めのU字形の凹線をもつものと、梢円形の凹線をもつものである。底部は上げ底ぎみである。これらの土器はいずれも赤褐色から黄褐色を呈し、器内面はナデ調整が施されており、粘土つなぎ目は内傾している。

このほかに黒褐色を呈する比較的薄い土器片がある。これらの土器は、本来的には縄文をもっていたが、遺物取り上げのさい、器表が剥離してしまった。

出土石器は少なく、黒曜石製の縦長剝片1点、古銅輝石安山岩製の削器と削片1点があるだけである。

(12) 第2号自然流路

調査区北西部を北流する川で、トレンチ調査を行ったが、対岸はつかめず、巾10m以上あり、深さは1.5mまで確認したが、北西に向って傾斜しておりまだ深くなるものと思われる。この川は第5・6号溝に切られており、川の壁にくついた形で、縄文時代中期から後期にかけての多量の土器が出土した。

出土遺物 胎土に滑石粉末を混入する土器が比較的まとまって出土した。口縁部は波状口縁をなすものが多く、口縁から胸部にかけて凹点文があるもの、巾5.5cmの断面U字形・V字形の沈線文があるものなどがある。底部は上げ底ぎみで、少し張り出している。底部には、鱗骨製土器製作台の圧痕を残すものもある。これらの土器は、いずれも、赤褐色から黄褐色を呈し、胎土には、滑石粉末・金雲母を多量に含んでいる。

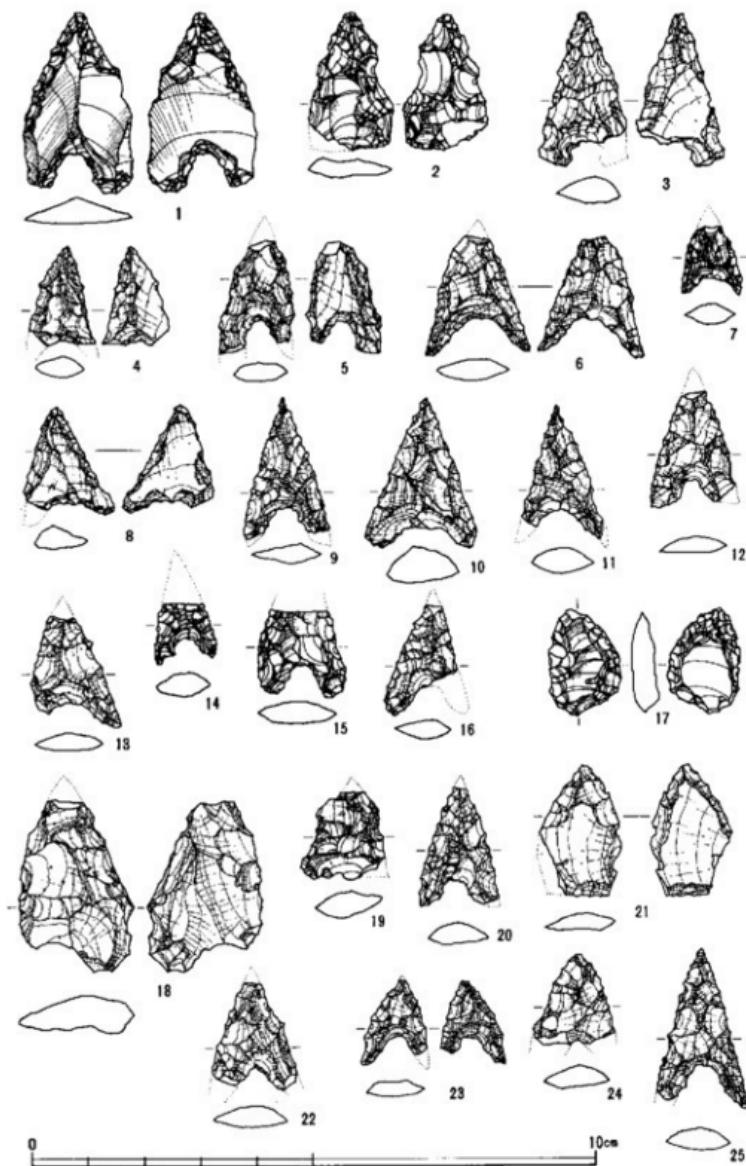
出土石器としては、古銅輝石安山岩製の削器などが少量ある。

(13) 客土層など出土遺物

客土層は、暗褐色から褐色の粘質土・シルトで、多量の縄文時代後期の遺物を含んでいる。この土層中には、ほかの時期の遺物が全然入っておらず、おそらく中世段階で、本遺跡内及び本遺跡のすぐそばからはこびこまれたと考えられる。また、第6号溝など、ほかの時期の遺構中からも縄文時代の土器が多量に出土した。

(山口)

第6号溝出土土器（第21図22～32） 22～24は、赤褐色を呈し滑石粉末を混入した板の下I式土器で、23は断面V字形、22・24は断面U字形の浅い凹線文を施す。いずれも内外ともナデで



第24図 寄土層出土石器実測図(1)

いる。25は、黄褐色を呈する粗製土器洞部片で、内面はナデ、外面は二枚貝調整のままである。金・黒雲母を含む。26は、内外とも剥離しているが、暗赤褐色を呈し滑石粉末を混入した阿高式系土器で、砂粒も多く含んでいる。27~30は、黄褐色を呈する粗製土器洞部片で、いずれも内外ともナデ調整を施す。また、27の胎土には金・黒雲母を含んでいる。31は、赤褐色を呈し胎土に滑石粉末を混入する阿高式系土器で、内外ともにナデしている。32は、黄褐色を呈する底部片で、多くの砂粒とともに金・黒雲母を含んでいる。内外ともナデ調整である。（田中）

客土層出土石器（第24・25図）この層からは、花崗岩や河原礫などを除いて1117点の石が出土した。この中には黒曜石鏡が14点あり、これを除くと石製品は1103点である。

石器としては、削器がもっとも多く115点あり、石匙を加えると126点にもなる。削器はいずれも古銅輝石安山岩製である。次に多い器種は石鏃で55点あり、末製品を加えると57点になる。石鎧は、古銅輝石安山岩製をもちいたものが多く44点もある。末製品も古銅輝石安山岩製である。黒曜石製石鏃の中には鹿島産出黒曜石を素材としたものが1点ある。なお使用痕ある剥片石器1点、石核2点、削片2点の姫島産出黒曜石を素材としたものがある。次に多いのが黒曜石製の使用痕ある剥片石器である。また石斧も8点あり、6点が磨製蛤刃石斧ではほかは打製石斧である。石斧の素材としては、玄武岩・滑石片岩・古銅輝石安山岩がもちいられている。ほかに砂岩製砥石7点、花崗岩製石皿2点、磨石2点、石錐4点、彫器2点、石槍1点などがある。ほかは、石核・剥片・削片である。本遺跡では古銅輝石安山岩製の石器が多く、黒曜石製の石器が少ない。削片にもこの傾向があり、黒曜石製が小さく、点数が327点であるのに対して、古銅輝石安山岩製が458点で、質量的にも多い。

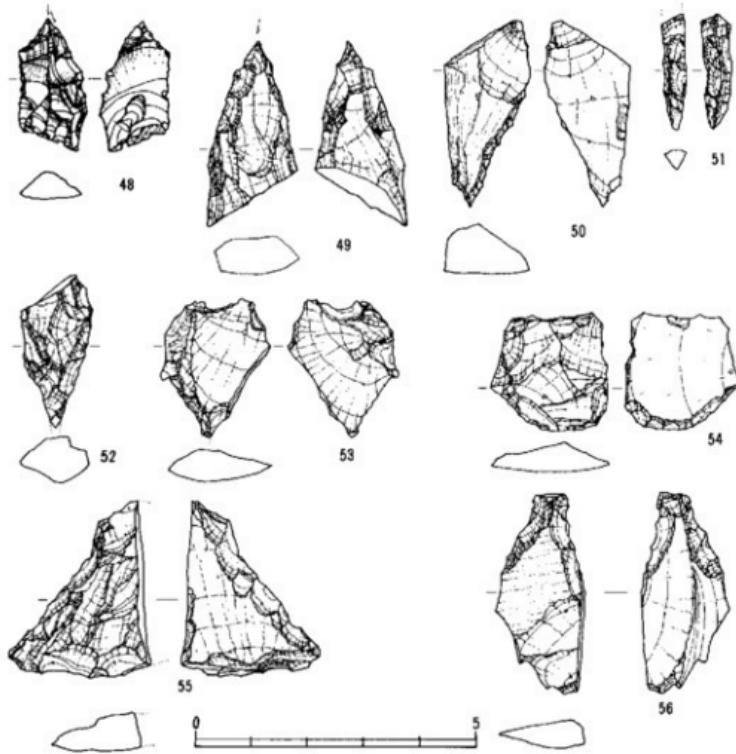
これらの石器は、客土層の土器と器種・器形から竪穴出土土器と同期のものといえよう。

（山口）

註

- (1) 竪穴および第6号溝からは、阿高式系の土器群（坂の下I・II式、阿高III式）と磨消繩文系土器（中津式土器）に大別される土器が出土している。したがって小稿では可能な限り両系統を識別して記述するよう努めた。なお、阿高式系土器の様式名は、拙稿「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』6, 1979によった。
- (2) これは、註(1)に示した拙稿において「逆目板調整」と呼称したものであるが、その後、「逆目」とは「順目」と対照をなす語であり、不適当であるとの指摘を横山浩一氏から受けた。指摘を受けて機会をもとぬまま数年を経てしまったが、ここで旧稿の「逆目板調整」なる用語は撤回しておきたい。御教示下さった横山氏に感謝する次第である。

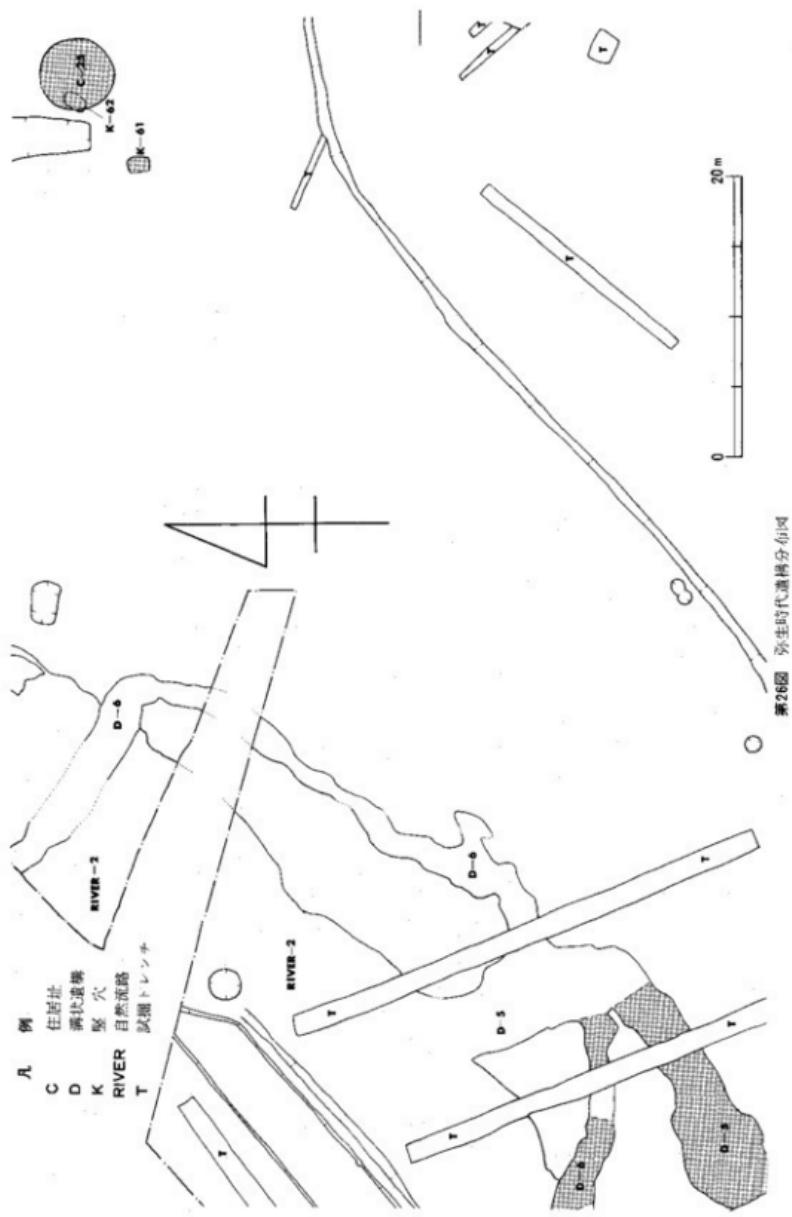
（田中）



第25図 客土層出土石器実測図(2)

客土層出土石器一覧表

No.	器種	石質	面考	摺入回	%	形 像	石質	面考	摺入回
1	石 鏟	黑曜石	剥片	重さ 2.72 g	29	△	古洞輝石安山岩	剥片	重さ 2.67 g
2	〃	〃	重さ 1.29 g	30	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 1.38 g	30
3	〃	古洞輝石安山岩	重さ 1.26 g	31	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 3.19 g	31
4	〃	〃	重さ 0.39 g	32	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 1.6 g	32
5	〃	〃	重さ 0.76 g	33	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 1.53 g	33
6	〃	〃	重さ 0.93 g	34	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 1.34 g	34
7	〃	〃	重さ 0.36 g	35	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 1.07 g	35
8	〃	古洞輝石安山岩	重さ 0.81 g	36	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 0.22 g	36
9	〃	〃	重さ 0.72 g	37	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 1.5 g	37
10	〃	〃	重さ 1.78 g	38	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 1.24 g	38
11	〃	〃	重さ 0.75 g	39	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 0.88 g	39
12	〃	〃	重さ 0.78 g	40	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 0.59 g	40
13	〃	〃	重さ 0.33 g	41	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 0.23 g	41
14	石 削	黑曜石	重さ 0.83 g	42	△	△	黑曜石	重さ 1.7 g	42
15	〃	〃	重さ 0.85 g	43	△	△	六前輝石安山岩	重さ 1.9 g	43
16	〃	古洞輝石安山岩	重さ 0.56 g	44	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 2.33 g	44
17	〃	黑曜石	重さ 1.1 g	45	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 1.6 g	45
18	〃	古洞輝石安山岩	重さ 4.1 g	46	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 4.53 g	46
19	〃	黑曜石	重さ 1.05 g	47	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 1.55 g	47
20	〃	古洞輝石安山岩	重さ 0.73 g	48	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 3.1 g	48
21	〃	〃	重さ 1.4 g	49	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 3.15 g	49
22	〃	〃	重さ 0.85 g	50	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 0.5 g	50
23	〃	〃	重さ 0.7 g	51	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 2.2 g	51
24	〃	〃	重さ 0.8 g	52	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 3.1 g	52
25	〃	〃	重さ 0.45 g	53	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 2.18 g	53
26	〃	古洞輝石安山岩	重さ 2.30 g	54	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 4.85 g	54
27	〃	黑鳥岩出雲龍	重さ 0.50 g	55	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 3.5 g	55
28	〃	古洞輝石安山岩	重さ 0.45 g	56	△	△	古洞輝石安山岩	重さ 3.5 g	56



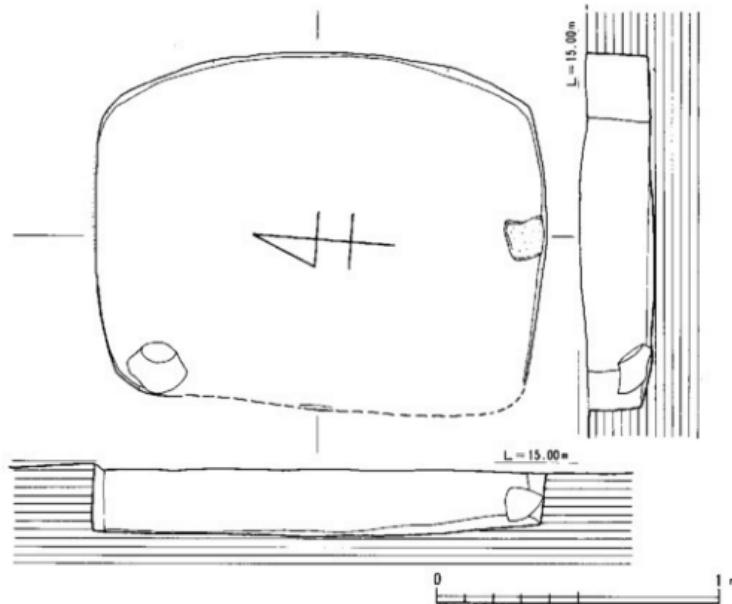
第26圖 弥生時代遺構分布圖

3. 弥生時代の遺構と遺物

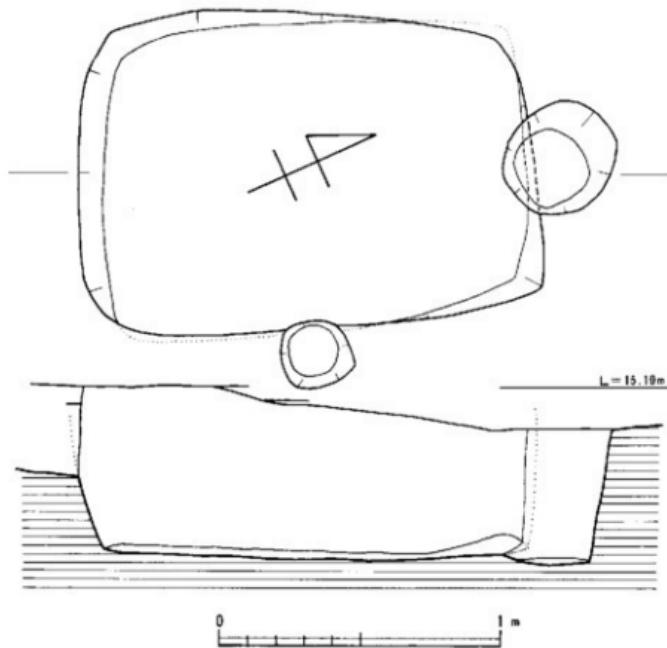
弥生時代の遺構としては、竪穴2基、住居址1基、溝状遺構2条を確認した。前記したように平面プラン確認であり、ここにあげたのは確認したものだけである。切り合い関係を加味し、土層観察でみるとかぎりは、弥生時代の遺構は、北流する2条の溝と、調査区北東部に分布しているといえよう。調査区北東部は、獨立柱建物・住居址が重複している。この住居址の中では、第25号住居址の調査を行ない弥生時代の住居址であると確認したが、1基のみでなく、方形プランの住居址の中には弥生時代に属するものもあると考えられる。さらに、竪穴遺構も、住居址群の下にあると考えられる。

(1) 第61号竪穴（第27図、第30図4）

本竪穴は、第22号住居址の床面で確認された竪穴で、 $1.55\text{m} \times 1.25\text{m}$ の隅丸長方形を呈し、深さは、20cmである。覆土は、暗褐色粘質土で、少量の上器、黒曜石製削片などが出土した。出土上器（第30図4） 表面は褐色、内面は、淡褐色を呈する竜形土器の底部で、胎土には、石英・砂粒が多く含み、堅緻で焼成も良い。器表はヘラ磨きを施し、内面は下から上へのナデ



第27図 第61号竪穴実測図



第28図 第62号堅穴実測図

調整で、底部には指押の跡がある。前期後半の土器と考えられる。ほかに弥生時代前期前半の甕の細片などの土器が出土している。

以上から本堅穴は、弥生時代前期後半に属する堅穴（袋状堅穴？）と考えられる。

(2) 第62号堅穴 (第28・30図)

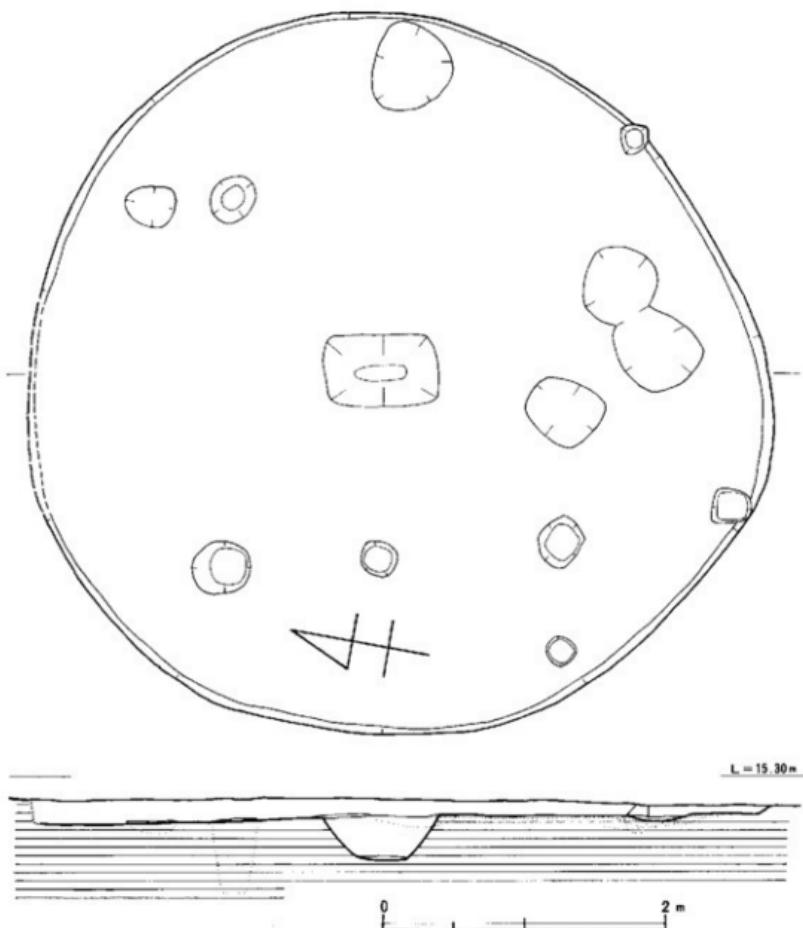
本堅穴は、第25号住居址の床面で確認された堅穴で、 $1.1\text{m} \times 1.6\text{m}$ 、深さ60cmである。第61号堅穴と同じように南北に長く、隅丸長方形を呈している。本堅穴からは、比較的まとまった土器や黒曜石製の削片などの遺物が出土した。

出土土器 (第30図8~12) 8は外反する口縁下端に刻目を巡らした甕形土器で、外面は横方向のナデ、口縁内面は、板状工具によるナデ調整が施されている。器面は明赤褐色から暗赤褐色を呈し、胎土には砂粒・石英粒を含み堅緻で焼成も良い。9は外反する短い口縁をもつ壺形土器で、口縁内面から口縁上端、胴部はヘラ磨きが、ほかの所はナデ調整が施されている。10は内傾する肩部に一条の沈線を巡らす壺形土器で、器表はヘラ磨きが施され、内面は指調整で

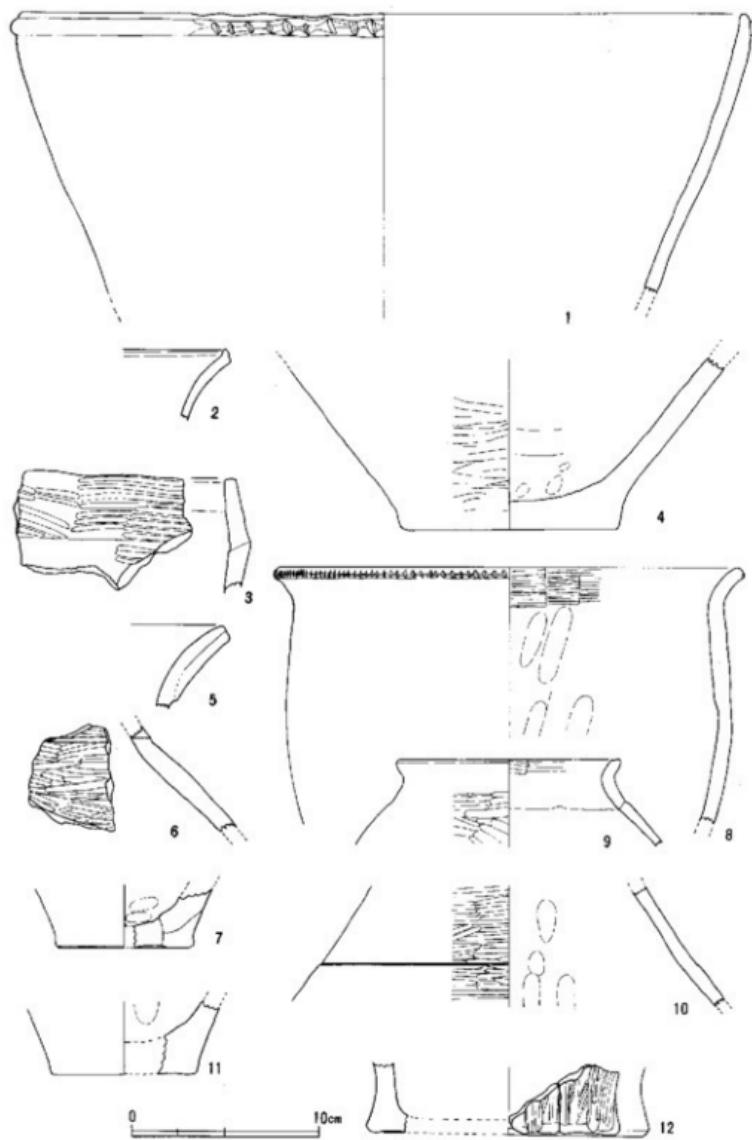
整形されている。器表は黒褐色、内面は淡褐色を呈し、胎土には、砂粒・石英粒を多量に含み堅緻で焼成も良い。11は甕の底部で、12は滑石を胎土に含む縄文時代の深鉢の底部である。これらの土器は前期後半から前期末に属すると考えられる。

以上から本竪穴は、弥生時代前期後半に属する竪穴（袋状竪穴）と考えられる。

(3) 第25号住居址（第29・30図）



第29図 第25号住居址実測図



第30図 弱生時代各造擣出土土器実測図

本住居址は、第23・24号住居址・掘立柱建物の柱穴に切られ、第62号竪穴を切っている。径5.1mの円形を呈する住居址で床面までの深さは20cmしか残っていなかった。住居址中央部には、南北80cm、東西50cm、深さ35cmの皿状の落ち込みが確認されたが柱穴は、造構が切りあっているため充分とはいえないが4個確認した。

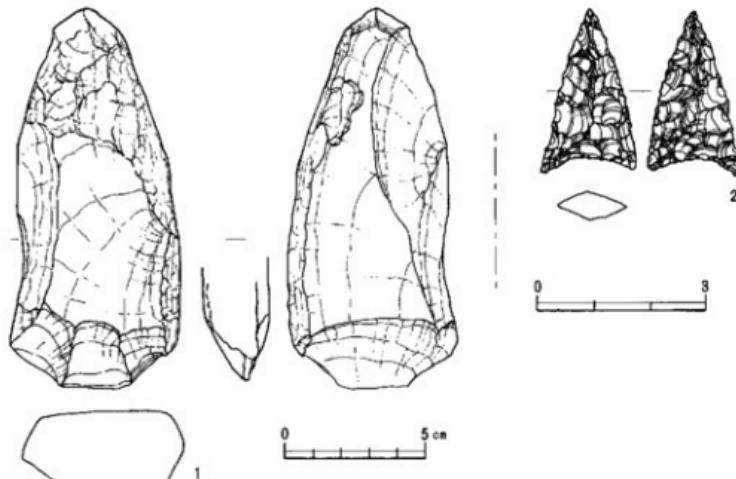
出土土器（第30図5～7） 5は肥厚した外反する縁の口縁部で、明赤褐色を呈し、胎土には石英・砂粒を含み焼成も良い。6は、肩部に一条の沈線を巡らす壺形土器で、器面は明褐色を呈し、胎土には石英・砂粒を含み焼成も良い。器表はヘラ磨きが施されている。7は、明褐色を呈し、胎土も堅緻で焼成も良い壺形土器の底部である。いずれも前期後半の土器である。

以上、出土土器と第62号竪穴との切り合い関係、ほかの遺跡の円形プランを持つ住居址の例から、本住居址は、弥生時代前半から中期初頭の住居址と考えられる。

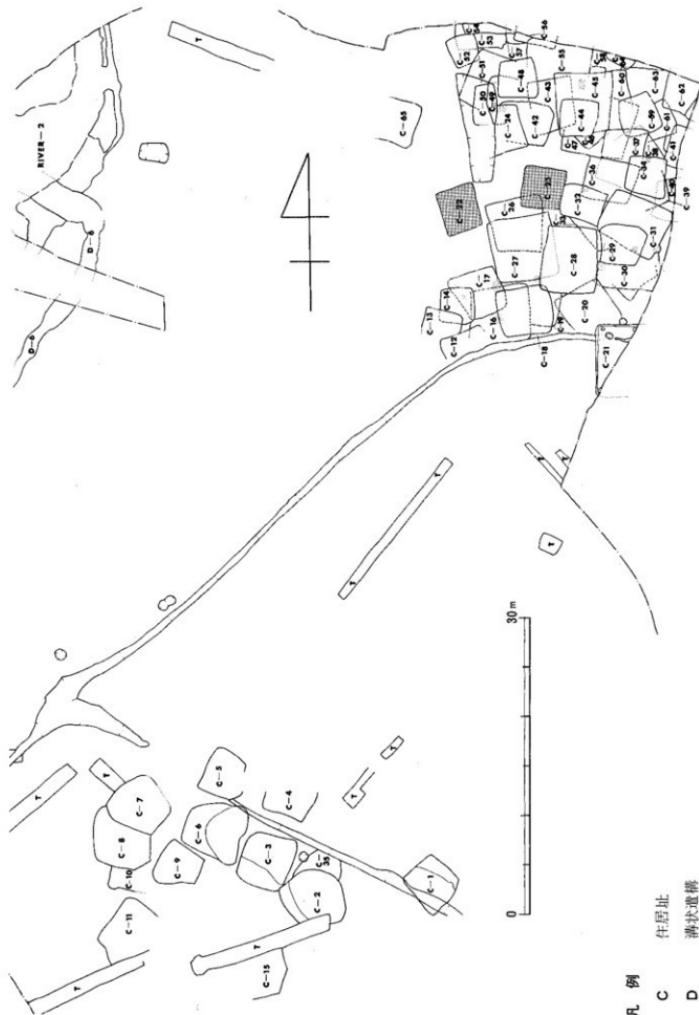
（4）溝状遺構（第20・30・31図）

弥生時代の遺構としては、蛇行しながら北流する第5・6号溝がある。第5号溝は、巾4m、深さ50cmの溝で第2号自然流路を切り、第6号溝に切られている。第6号溝は、巾2m前後、深さ45cmで、北に行くに従って深くなり、第5号溝、第14号竪穴など縄文時代後期の竪穴・第2号自然流路を切っている。

第5号溝出土遺物（第30図1～3） 2は、屈曲して短くたつ口縁部をもつ鉢形土器の口縁部で、器面は、ナデ調整が施されている。3は、コの字形の口縁部をもつ鉢形土器で、器表は粗



第31図 第6号溝出土器実測図



第 32 図 古堆時代遺構分布圖

凡例

住居址

溝状構

卷之三

い条痕、内面は右から左方向のナゲが施されている。器面は灰褐色から黒褐色で、胎土には砂粒・石英粒を含み焼成も良い。なお粘土のつなぎ目は内傾している。1は、口縁直下に刻目はりつけ突帯を有する壺形土器で、器面はナゲ調整が施されている。器面は黄褐色を呈し、胎土には石英・砂粒を含み堅微で焼成も良い。ほかに、比較的まとまった土器や黒曜石製の削片などが出土している。その中には、胴上半部に格子目の沈線を有する壺形土器の細片などがある。以上の出土遺物と博多区諸岡遺跡F調査区出土の突帯文土器や共伴遺物と近似していることから第5号溝は、弥生時代前期初頭の溝といえよう。

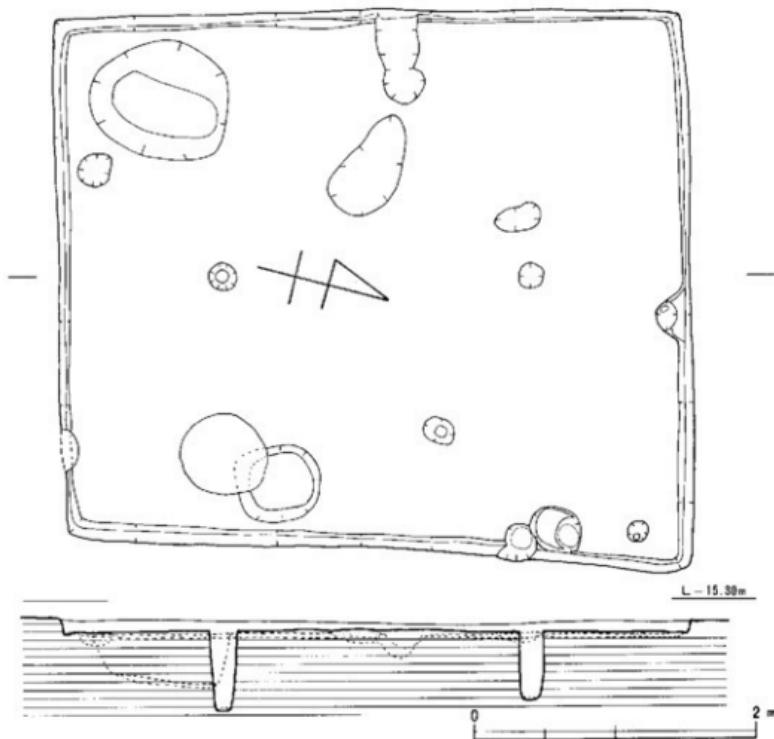
第6号溝（第21図22～32、第31図） 出土土器の一部については前述（29ページ）したが他に、縄文時代後期から晩期の鉢形土器・深鉢・弥生時代前期の土器などが出土している。石器は、石斧・石鎌・石匙・黒曜石製・古銅輝石安岩製の剥片・削片などが出土している。第31図1は、玄武岩製の打製石斧である。重さは34.9gである。2は、黒曜石製の打製石鎌で、表裏とも入念な二次加工が加えられている。重さは1.5gである。以上第2号自然流路、第14号などの竖穴、第5号溝を切っていること、出土遺物中に本遺跡で遺構を確認していない縄文時代後期から晩期にかけての遺物が出土していることから第6号溝は、縄文時代後期後半から弥生時代前期後半の時期に比定できよう。

4. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては、調査区南部で13基（A群）、北東部で51基（B群）の住居址を確認した。たびたび述したように平面プラン確認でありすべてが古墳時代の住居址ではなく、とくに住居址B群の中には弥生時代の住居址を含んでいると考えられる。また縄文時代・古代の竖穴としたものには、古墳時代の竖穴を含んでいると考えられる。第1・21・22・23号住居址について精査を行なった。

住居址A群は、いずれも痕跡をとどめているにすぎなかった。A群の第1号住居址が、床面のプランが比較的よく残っている。この住居址は1辺4mの隅丸方形の住居址で、北側に巾1.2mのベッドをもち4本柱からなっている。出土遺物としては須恵器の壺の細片及び甕の胴部片などが出た。遺構確認時に、住居址A群周辺では多くの須恵器が出土した。これらの須恵器は6世紀中頃から後半にかけてのものが多い。住居址A群は方形プランの住居址で1辺及び2辺にベッドをもつもので、6世紀頃の住居址群と考えられる。

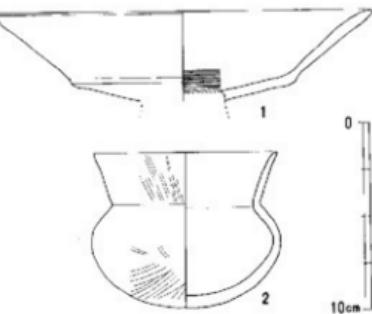
住居址B群は51基（古墳時代の遺構としておく）からなり、第22・23号掘立柱建物や掘立柱建物の柱穴に切られ、25号住居址などの弥生時代の遺構を切っている。また各住居址は住居址どうしで切り合っており地山が見えないほどである。大別すると、1辺6m前後の比較的大きい住居址と、1辺4m前後の住居址がある。17・18・20・24・30・32号などの住居址は、辺の1辺に焼土があり焼けた粘土塊があるところなどから窓をもつ住居址と考えられる。住居址B



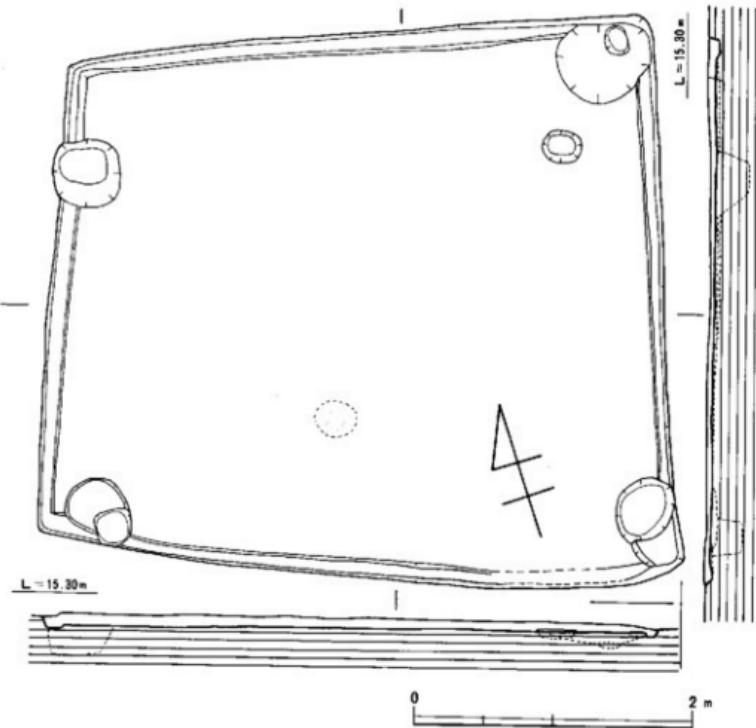
第33図 第22号住居址実測図

群も、残存状態はあまり良くなく、20cm前後の壁が残っているにすぎなく、掘立柱建物を造る時かそれ以後に削片されたと考えられる。住居址A群周辺の遺構確認時には5世紀以降の土器や須恵器が多量に出土した。住居址A群は、第25号住居址や第61・62号竪穴や第22・23号掘立柱建物があること、調査区内では最も高い所に位置していることなどから、弥生時代前期後半から古代にかけて営まれた可能性が高いといえる。

調査区内で、古墳時代の遺構は南北に分れており、その間に古墳時代の遺構といえるも



第34図 第22号住居址出土土器実測図



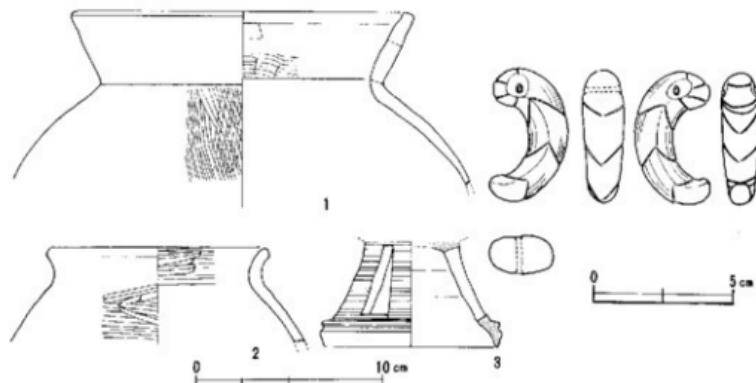
第35図 第23号住居址実測図

のはなかった。ただ第2号自然流路は浅いながらも残っていたと考えられる。

(1) 第22号住居址（第33・34図）

本住居址は、北部で第22号掘立柱建物に切られているほか、掘立柱建物の柱穴に切られ、第61号竪穴を切っている。南北4.5m、東西4m、深さ10cmの方形の住居址で、中央部の西寄りに焼土と炭化物がある。主柱穴は南北の2本で、柱穴は壁面から1.1mに位置し、径は18cmで、床面から約50cmの深さをもっている。壁面に沿って壁溝が巡らされている。

出土土器（第34図） 1は、环部下半で屈曲してひらく土師器の高环の环部で脚部はない。器面は横ナデ調整で环部底にはハケ目が施されている。器面の色調は明赤褐色で、胎土には砂粒を含んでおり堅緻で焼成も良い。2は小形丸底壺で、器表面の胴下半部は粗いハケ目が口縁部には細かいハケ目が施され、胴上半部から内面にかけてはナデが施されている。器面は、暗褐色を呈し、胎土には砂粒を含み堅緻で焼成も良い。ほかに土師器の壺の細片などが出土してい



第36図 第23号住居址出土遺物実測図

る。

以上から、本住居址は5世紀前半期の住居址といえよう。

(2) 第23号住居址（第35・36図）

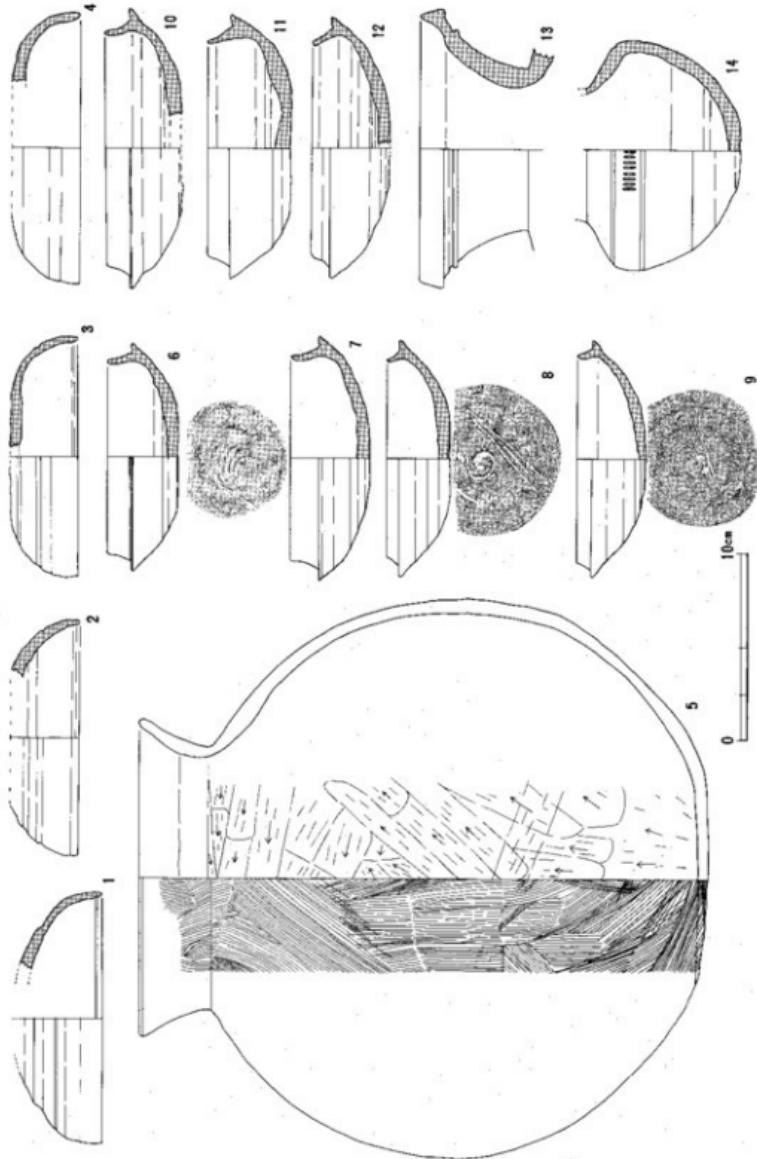
本住居址は、井戸状遺構と思われる第89号竪穴や掘立柱建物の柱穴に切られ、第25・26・32号などの住居址を切っている。東側の南北4m、西側の南北3.3mの台形の住居址で、住居址中央部のやや南よりに炉がある。壁に沿って巾10cmの壁溝が巡らされている。主柱穴は4本で、床面から20cmの深さを持っている。壁溝から碧玉？製の勾玉が出土した。重さ19.3g（第36図）出土遺物（第36図） 1は屈曲して外側にかるく開くヨの字形の口縁をもつ土師器の器表面部、口縁部内面はハケ目が施されている。口縁部内面はハケ目の上から、外面は横ナデ調整が施されている。2は弥生時代前期の壺形土器で第30図9と同一個体と思われる。3は3ヶ所に透かしをもつ須恵器の高环の脚台部である。器面は暗灰色を呈し、胎土には多くの砂粒・石英粒を含み焼成も良い。ほかには、土師器や須恵器の細片が出土している。

以上から本住居址は、6世紀前半期の住居址と考えられる。

(3) 表土層出土遺物（第37図）

本遺跡では、多量の須恵器、土師器が出土した。5が土師器で、ほかは須恵器である。1～4は環蓋、5・13は壺、6～12は壺身で、14は直口壺である。須恵器はいずれも暗灰色を呈し胎土には石英粒を含み堅緻で焼成も良い。7～9はヘラ記号があり、14の器表には自然釉がみられる。5は土師器の壺である。ほかに滑石製の断面台形の紡錘車（重さ29.1g）などがある。

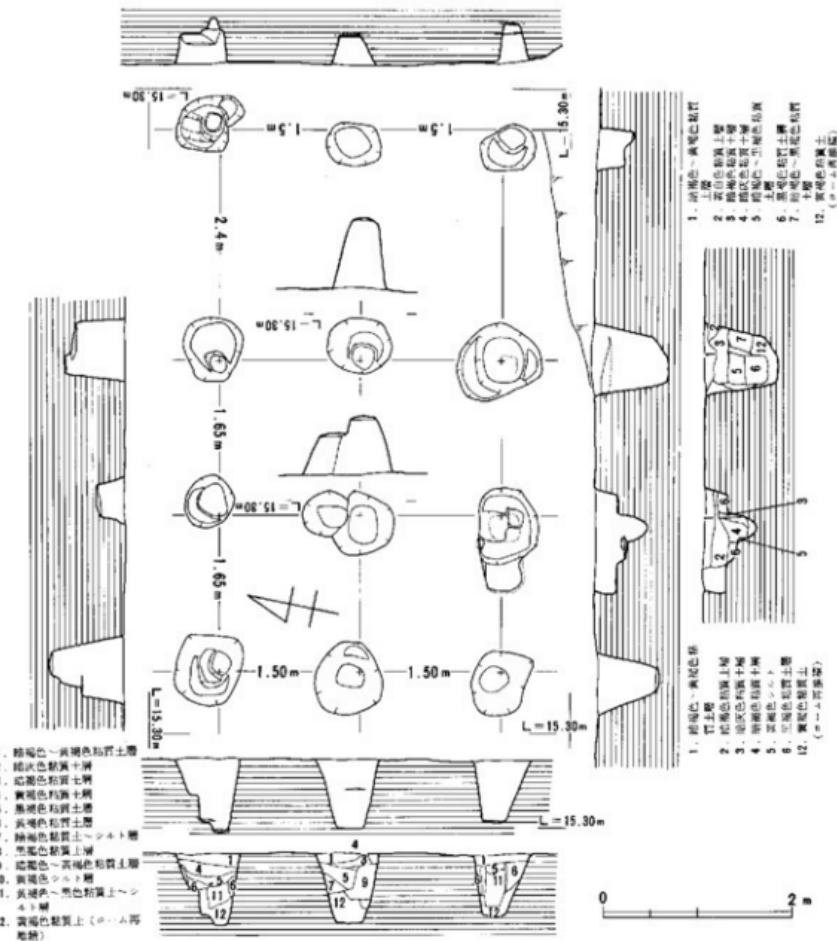
以上の出土遺物は、6世紀に属するものであるが、6世紀中頃のものが一番多いといえる。



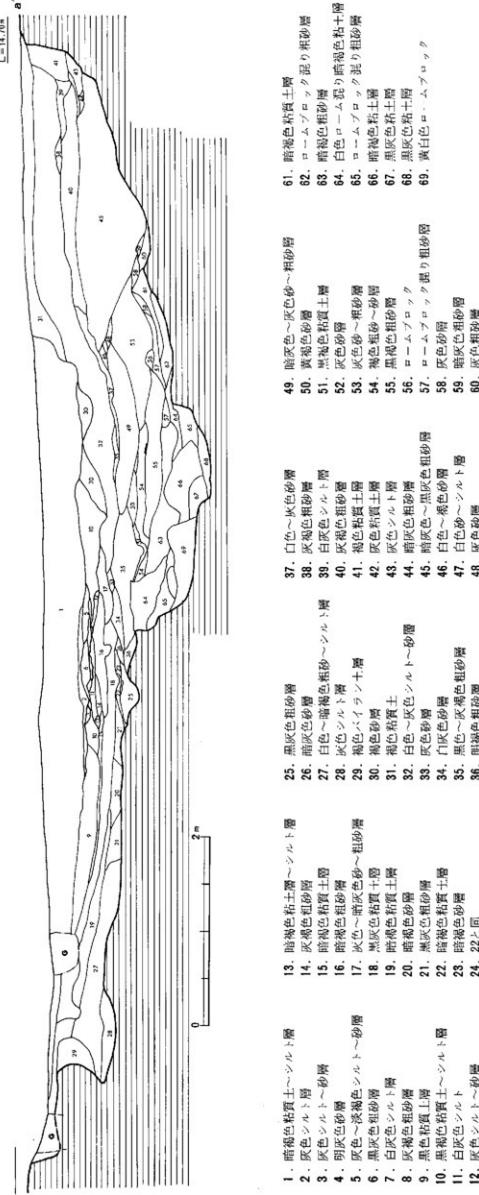
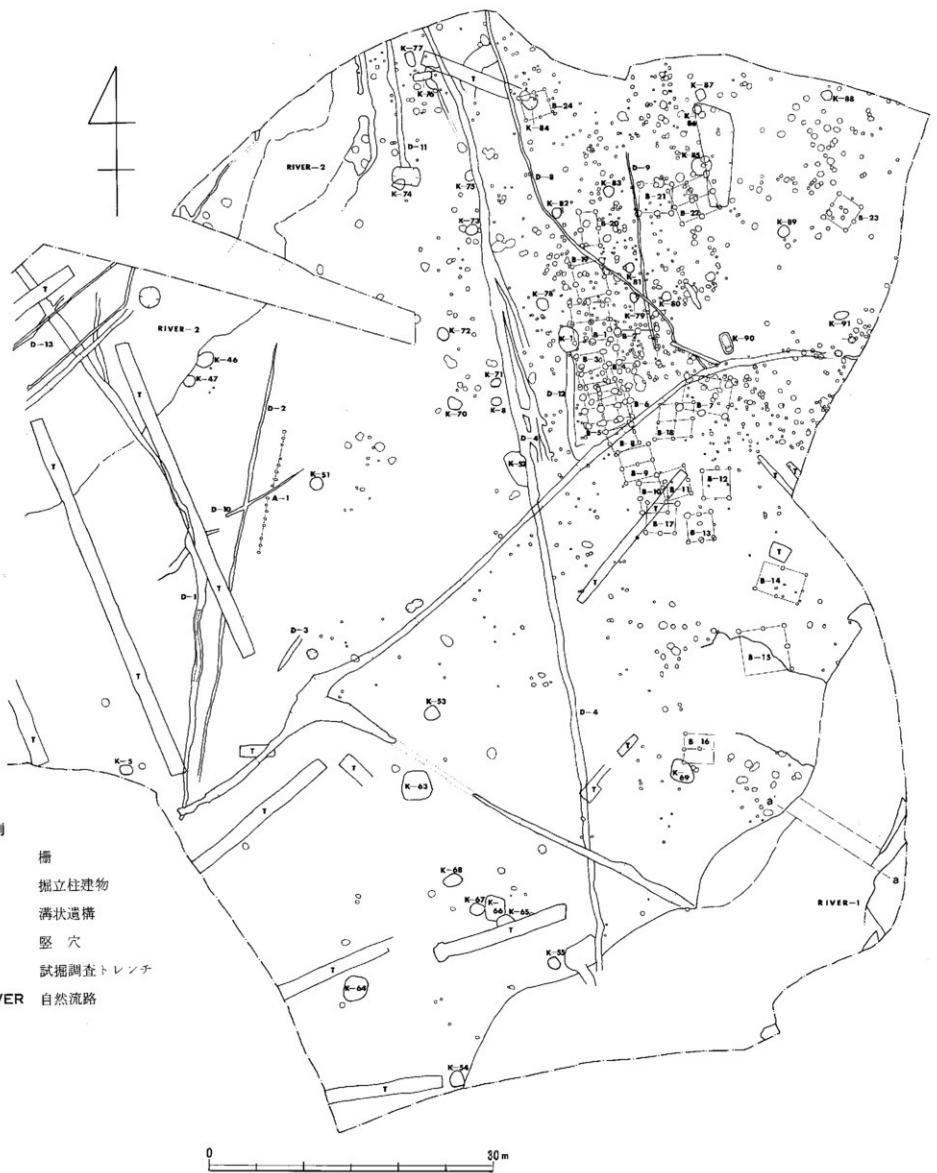
第37图 古植物遗物与陶器

5. 古代の遺構と遺物

古代の遺構は、第2章で記したように、表土層・客土層を除いた段階で確認された。なお客土層は、調査区北東部ではなく、東西に走る北側の現代の溝より南側に分布しており、北側に位置する遺構としたものには、中世の遺構もあると考えられる。

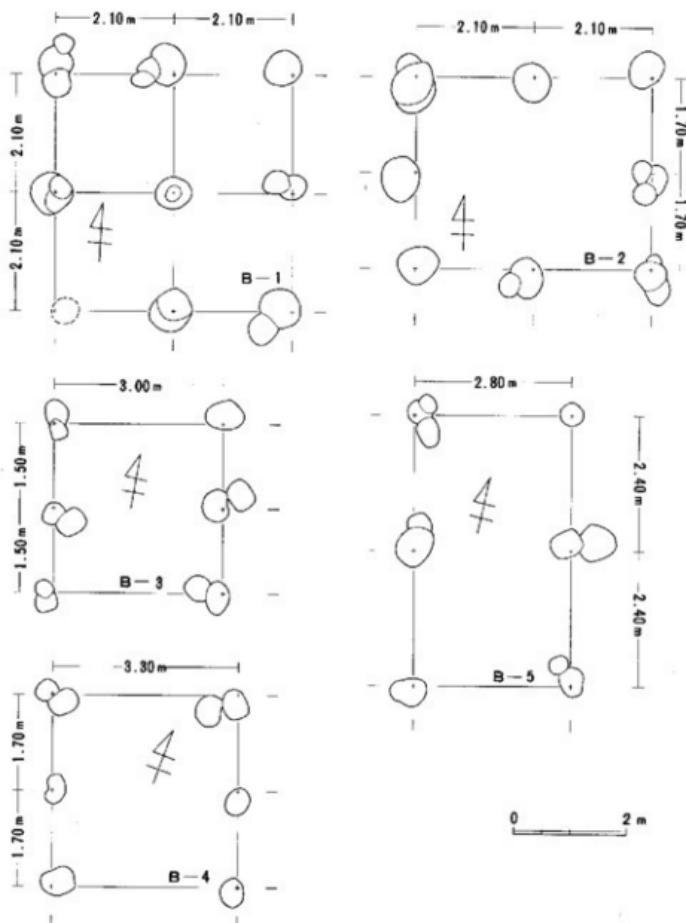


第39図 第6号埋立柱建物実測図及び断面図



第38図 古代遺構分布図及び第1号自然流路断面図

客上層の上面及び調査区北東部の表土層には12~13世紀の青白磁を含んでおり、必ずしも古代の遺構とはいえないが、櫛列1列・掘立柱建物24棟・溝状遺構10条・堅穴39基（土壠墓状の遺構も含む）、掘立柱建物の柱穴多数・自然流路2条を確認した。遺構の分布は、調査区の北西部と南西部に2条の北流する自然流路があり、すべてこの時期の遺構はこの間に位置している。溝状遺構は第10号溝が北東一南北方向であるほかは、すべて南北方向の流路をもっている。掘立柱建物24棟はいずれも第4号溝に沿った形で、第4号溝の東側に位置している。しか



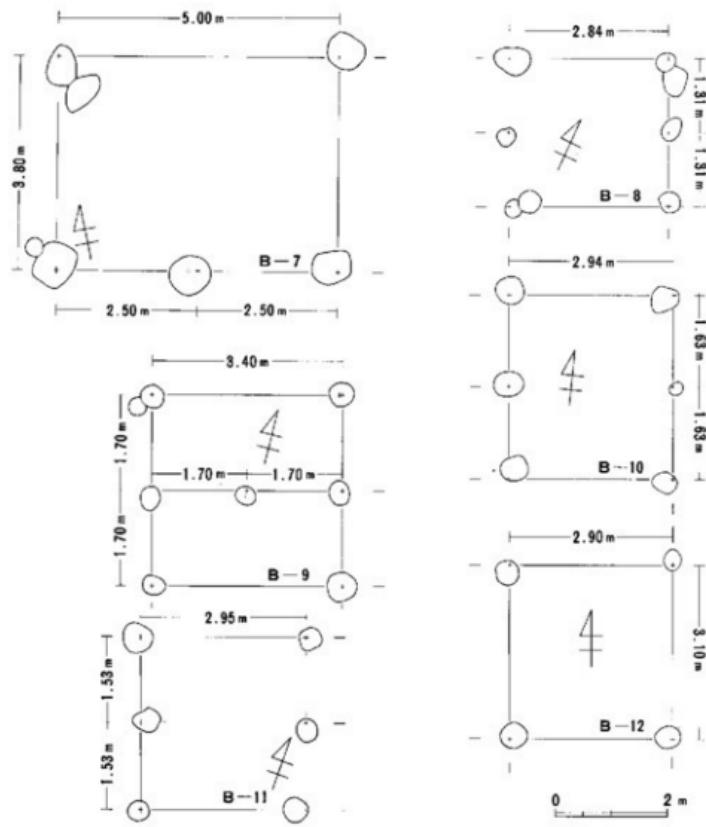
第40図 第1~5号掘立柱建物平面図

し、掘立柱建物の柱穴は、第4号溝の西側にも分布している。調査における確認からすると、古代の遺構は第1号柵列より西に出ることはないと考えられる。

古代の遺構については第6号掘立柱建物、第1・8号竪穴、第1号溝・第1号自然流路の一部を精査した。

(1) 第6号掘立柱建物(第39図)

本建物は、第4号溝の東6m、北側の東西に走る現代の溝の北に位置する2間×3間の倉庫と考えられる建物である。桁行5.7m、梁行3mであるが、元来は、桁行3.3m、梁行3mの2間×2間のベタ柱の建物と考えられる。東側の南北にならぶ柱穴は、建て増しか。柱痕跡の土層

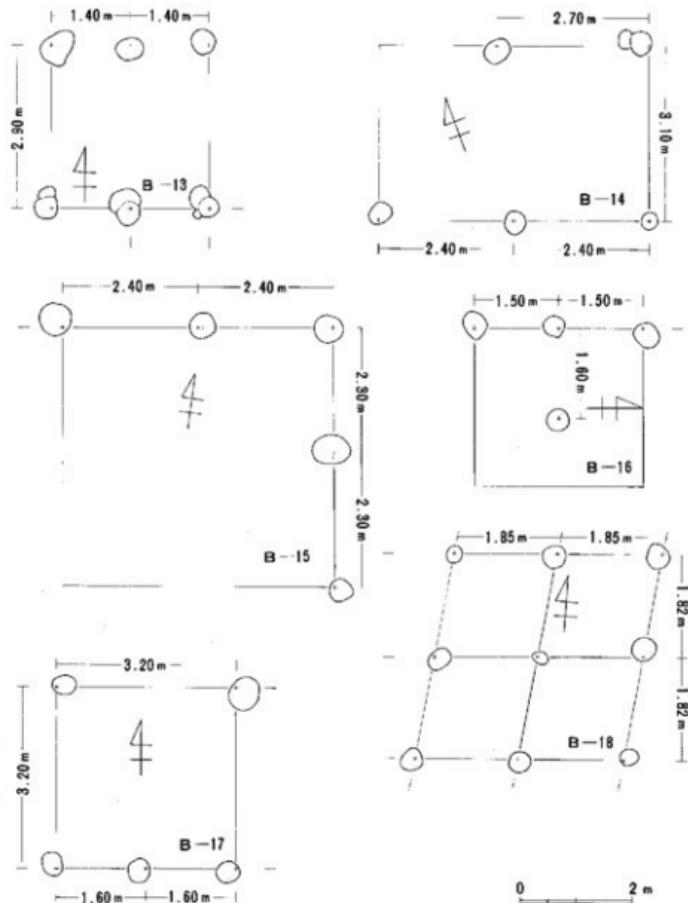


第41図 第7～12号掘立柱建物平面図

が残っており、それから推定すると、柱は一辺30cmの方形に整形した柱と考えられる。なお梁行の方位はN-4°-Wである。なお柱穴からは、縄文時代後期の土器が出土しただけである。

(2) その他の掘立柱建物 (第40~43号)

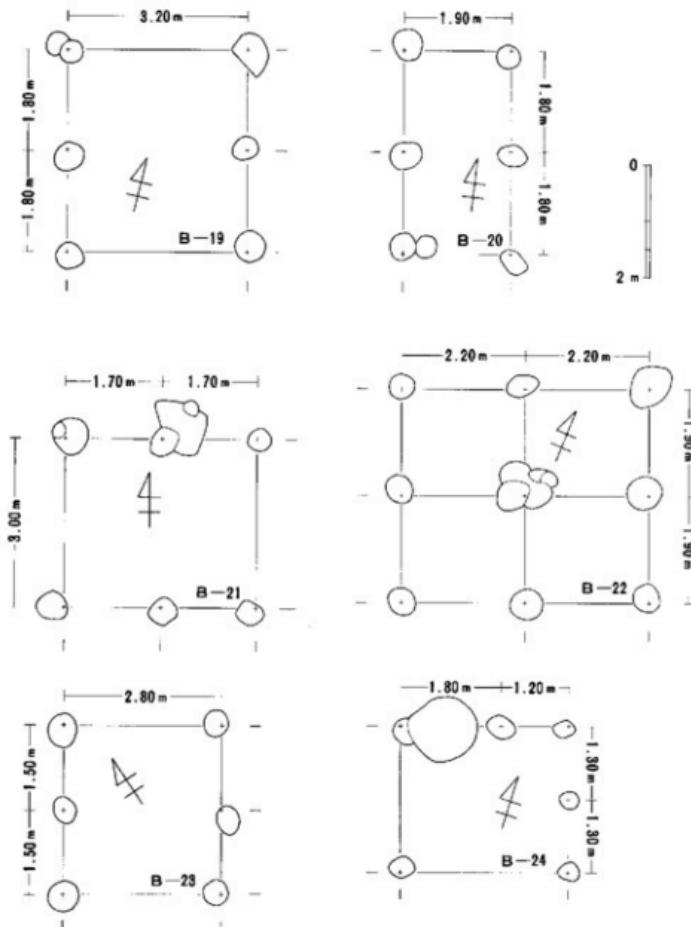
掘立柱建物は第6号を除いて23棟確認した。2間×2間のベタ柱が4棟、1間×2間が16棟、2間×2間が3棟、1間×1間が1棟で、1間×2間のものが一番多い。1間×2間のものの



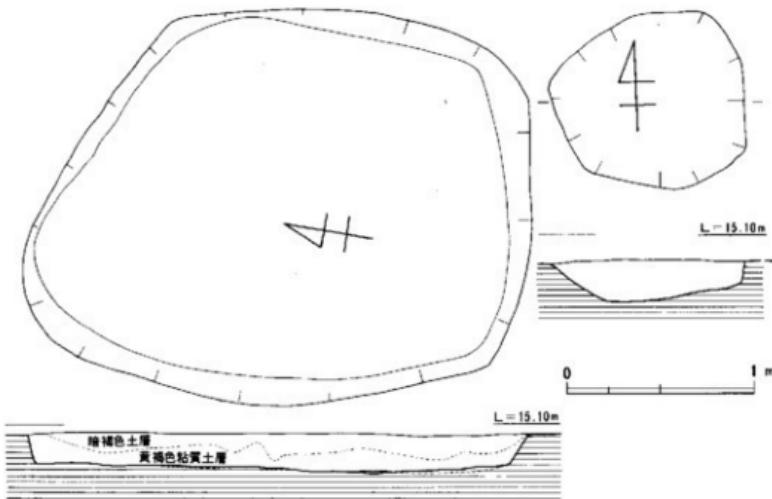
第42図 第13~18号掘立柱建物平面図

中には、中柱をもつものが2棟ある。第1・6・18・22号の2間×2間のベタ柱をもつ4棟は倉庫と考えられる。第9・16号のように中柱をもつものも倉庫と考えられる。さらに桁行・梁行が同じかほぼ同じの第3・4・8・10～13・15・17・19・21・24・25号も倉庫と考えられる。すると住居と考えられる建物は第2・5・7・14・20号の5棟にすぎない。

桁行・梁行の方位でみると、磁北に近い方位をもつ建物が5棟、N-4°-W前後の方位をもつ建物が4棟、N-10°-W前後の方位をもつ建物が4棟、N-14.5°-W前後の方位をもつ建



第43図 第19～24号掘建柱建物平面図



第44図 第1・8号竪穴実測図

物が3棟、N-18°-W前後の方位をもつ建物が2棟、N-24°-Wの方位をもつものが2棟、N-Eの方位をもつものは、まとまりはないが4棟となり、7種以上に分けられる。

柱間の距離は、2間×2間のベタ柱をもつ倉庫からみていくと、第1号が2m、第15号が2.4mでそれぞれ1辺4m、4.8mの正方形である。第18号の柱間は1.8mで、桁行・梁行とも3.6mであるが、N-6.5°-Eの方位でずれており、平行四辺形となっている。ほかの建物は、第8・24号がほぼ同じ柱間で梁行は1.3mである。最も広いのは第7号の梁行で3.8mである。梁行は3m前後に、桁行は、2.4m、1.8m、1.6mと分散している。

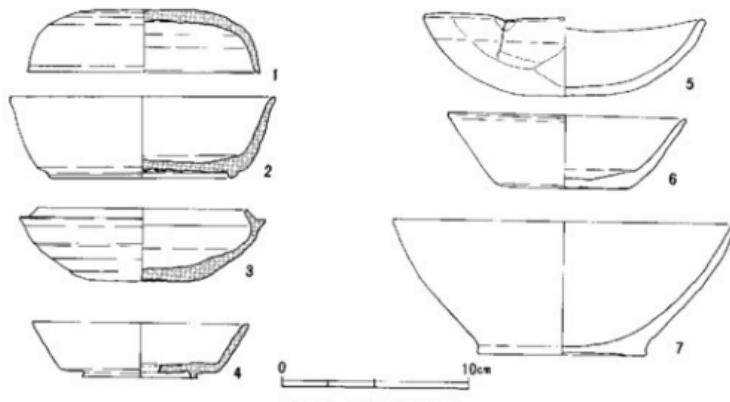
(3) 竪穴状遺構(第44図)

竪穴は39基確認したが、前述したように古墳時代・弥生時代、または中世のものを含んでおり性格も、まちまちと考えられる。

第76・77・90号は土塗墓と考えられる。第90号は巾1m、長さ2m、深さ60cmの長方形を呈する上塙であるが、木棺の痕跡はなく、副葬品もなかった。出土した遺物は、土器や須恵器の細片で時期を決定する資料の出土はなかった。

第88・89号など円形プランの竪穴は井戸址と考えられるが、未掘のため性格は不明である。

第1・52号竪穴は、比較的大形の竪穴である性格確認のため第1号と円形プランの第8号について精査した。第1号竪穴は、第4号溝の東側に位置し、第1号掘立柱建物を切っている。直径2.7m、短径2.1mの竪穴で、深さは20cmであり、床面は平らである。埋上から自然堆積と考え



第45図 古代土器実測図

られる。出土遺物としては、少量の土師器・須恵器の細片が出土しただけである。

第8号竪穴は、第4号溝のすぐ西にある円形の竪穴で、埋土は黒褐色の粘質土で、出土遺物としては、縄文土器（16ページ）や土師器の細片がある。

（4）溝状遺構

溝状遺構は、南北方向が8条、北東・南西方向のものが2条確認された。第1・8号は蛇行しながら北上するU字溝である。第1号溝中にはトレンチによる部分調査を行なった結果、土師器の塊が出土した（第45図7）。

第4号はN-9°-Wの方位をとるU字溝で現代溝に切られ、第1号自然流路に連なっている。第9号がN-6.5°-W、第2号がN-6.5°-E、第10号がN-55°-E、第13号がN-50°-Eの方位を取っている。

（5）自然流路（第38・45図1～3・5・6）

調査区の南東部と北西部に2条確認した。北西部の第2号自然流路（以下川とする）は、この時期には、巾も5m前後と狭くなっている。一方第1号川は巾12m前後で北に向って深くなっている。深さは1.8mで自然堆積で埋まっていると考えられる。

第1号川からは、6世紀後半から8世紀末にかけての須恵器・土師器・瓦などの遺物が出土した。第1号川は、客土層がおおっていること、第45図2・4～6のような遺物が上層から最下層まで出土することなどから、7世紀後半から8世紀末の川といえよう。

第4章 総括

1. 各縫穴出土の縄文土器について

本遺跡の縫穴群出土土器は、基本的には、阿高式系土器と磨消縄文土器である中津式土器とが複合したものである。この様相は、土器の保存が悪く全体の出土量が少ないという制約はあるにせよ、廃棄の一括性を認める限りは編年論あるいは集団組成論的に重要な意味をもつてゐるといえよう。よって本項ではこれらの問題について若干のまとめを行なつてみたい。

まず、編年論的には、西日本における後期開始期の指標とされる中津式土器と九州在地のどの土器様式が並行するかという問題がある。筆者はかつて、一連の阿高式系土器にみられる凹点文の型式変化に注目し、福岡県糸島郡志摩町天神山貝塚出土の中津式と阿高式系との折衷土器に施された凹点文を構わたとして、凹上文bタイプの時期、すなわち坂の下I式・阿高田式の終末期以降が中津式土器に並行するものとした。⁽³⁾ この想定は、その後発表された佐賀県西松浦郡西有田町坂の下遺跡貯蔵穴内共伴関係、すなわち、貯蔵穴内から出土する土器は中津式と「胎土に滑石を混入しない」「南福寺系統最終末期」（筆者のいう坂の下II式）であったという事実とも矛盾するものではなかった。

そこで、本遺跡において中津式土器と共に伴した阿高式系土器のうち、明らかに様式を認定した個体数をみてみると⁽⁴⁾、坂の下I式が量的に優勢であることがわかる（表i）。すなわち、一定量を出土した12号縫穴においては坂の下I式7点に対して同II式1点、阿高田式2点であり、全体でみても14点・5点・3点という比率である。これは、坂の下II式と中津式とが組み合わさっていた坂の下遺跡貯蔵穴内出土土器よりも古相を呈する土器群であり、城の下I式からII式への移行過程にある段階とみることができる。

次に、本遺跡出土の坂の下I式土器をみてみると、凹線文は、断面U字形の個体もあるものの、断面V字形・コの字形のものが多く、いずれも浅い。凹線と組み合わさる凹点文は、かつての筆者の分類でいえば、断面U字形で粘土のたまりがなく、内部をナデ仕上げたaタイプに入る（第19図8、第21図2）と、断面U字形だが浅く中央に粘土のたまりと段差があるbタイプ（第19図23）の両者がある。しかし、前二者も、ナデで中央の粘土のたまりこそないものの、小ぶりで浅く、純粹なaタイプとはいひ難いものである。また、凹点文のみを施した半精製土器も、1段目は純然たるaタイプの凹点文であっても、2段目は浅くくずれたものが多い。このようなあり方は、坂の下遺跡における典型的な坂の下I式と比較して新しい様相を呈しており、坂の下I式からII式へと移行しようとする段階、すなわち坂の下I式の後半期として把握することができるだろう。したがって、前述の想定よりもやや遅って、坂の下I式の後

半期から坂の下II式にまたがって中津式土器が並行するといえる。とはいって、沢下孝信の項にあるように、本遺跡を含めた九州～瀬戸内の中津式土器は、関東の称名寺式土器に比して新相をもった土器であり、関東における後期の開始とは絶対年代において若干のズレを見込まなくてはならないことはいうまでもない。

さて、次に阿高式系土器と中津式土器との複合状況をみてみよう。表Ⅰは堅穴ごとに各様式の出土点数を示したものであるが、もとより全体の出土量も少なく、系統の不明な個体も多いので、このような表示によって比較すること自体無意味かも知れない。しかし、一定量を出土した12号堅穴においては阿高式系土器23点(76.6%)、中津式土器7点(23.3%)、全体でも前者が62点(76.4%)、後者が17点(23.5%)とほぼ同様な比率を示しており、おおまかには実情を反映しているとみていいだろう。ところで調査時に土器の保存が悪くて取り上げが不能であった個体も多く、その際の所見では胎土中に滑石粉末を混入するものとそうでない土器がほぼ同率であったという。この事実は阿高式系土器と中津式土器が同頻度で存在していたかのような印象を与える。しかし、坂の下I式において滑石粉末を混入するのはまず半精製土器までで、ほとんどの粗製土器は滑石を混入せず、黄褐色を呈する個体も多い。さらに中津式土器においてはきわめて高率で存在する貝具調整の粗製土器が6点と少ないことも、阿高式系土器の量的優勢を物語っているのである。

以上のように、本遺跡においては4:1から3:1にかけての割合で阿高式系が量的に優勢をなしているが、次に質的側面をみてみることにしたい。まず、阿高式系土器をみてみると、少數である阿高III式はともかくとして²⁷⁾、精製～粗製のセットが揃っている。また、器形も、基本的に深鉢形であり、まれに鉢形もしくは浅鉢形がみられるというあり方を示している。一方、中津式土器をみてみると、少量ながらも、精製・半精・粗製のセットは揃っており、器形的にも深鉢を基本とする本来のあり方である。

このような複合状況は、該期の他遺跡とは異なるものである。たとえば、坂の下遺跡では中

表Ⅰ 様式別出土点数

堅穴	坂の下 I式	坂の下 II式	阿高式	阿高式系	中津式		
					精 製	半精 製	粗 製
2号	2(33.3)	0(0)	0(0)	2(33.3)	1(16.6)	0(0)	1(16.6)
3号	0(0)	0(0)	0(0)	1(100)	0(0)	0(0)	0(0)
4号	0(0)	1(50)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(50)
6号	1(20)	0(0)	0(0)	1(20)	2(40)	0(0)	1(20)
7号	0(0)	0(0)	0(0)	1(33.3)	0(0)	0(0)	2(66.7)
8号	0(0)	0(0)	0(0)	1(100)	0(0)	0(0)	0(0)
9号	0(0)	1(33.3)	0(0)	1(33.3)	1(33.3)	0(0)	0(0)
10号	3(60)	1(20)	0(0)	1(20)	0(0)	0(0)	0(0)
11号	0(0)	1(14.2)	1(14.2)	5(71.4)	0(0)	0(0)	0(0)
12号	7(23.3)	1(3.3)	2(6.7)	13(43.3)	2(6.7)	4(13.3)	1(3.3)
14号	1(20)	0(0)	0(0)	4(80)	0(0)	0(0)	0(0)
計	14(28.6)	5(7.3)	3(4.1)	30(44.1)	6(8.8)	4(5.9)	6(8.8)

津式は精製土器のみであり、
天神山貝塚や福岡市西区桑原飛櫛貝塚などでは、中津式土器が優勢をなし、阿高式系土器は半精製・粗製土器がほとんどで、さらに中津式優勢の折衷上器もみられるのである。複合状況におけるこれらの相違は、若干の時期差はありながらも

中津式土器という一様式の時期幅に収まる現象であり、かつ、本来独自の文化圏をなしてきた九州へと中津式土器が伝播・展開していく過程におけるものである。そして、この時期を契機として、阿高式系土器は、それ以降分布も狭まり、後期中葉後半においては磨消繩文土器を主体とする土器組成の下層の一部をなすにすぎなくなるのである。したがって、以上のような脈絡でみていくと、上述の複合状況における相違は中津式土器伝播におけるいくつかの段階を示しているといえよう。しかし、この過程は、前記のように、中津式一様式の時期幅内に収まるものであり、磨消繩文土器が数時期をへて徐々に伝播する中九州の状況とは異なっていることは、阿高式系上器分布圏の周縁をなす北部九州の事情を反映したものであろう。

以上のように、本遺跡の竪穴群は、既掘分に関する限り、おおむね繩文時代後期前葉前半に位置するものである。坂の下遺跡の調査以来福岡市を中心として貯蔵穴群の検出が相次いでいるが、その多くは本遺跡とはほぼ同時期であり、かつ、阿高式系土器を主体とするものようである。これらの現象の背景や中津式土器伝播のプロセスとその実態や諸事象の連関等、追求すべき問題も多いが、基礎データの不足を否定しえないので現状である。後日を期したい。

最後に、本報告にあたっては福岡市埋蔵文化財センター山口謙治氏にいろいろと御配慮を賜り、志免中学校教諭杉村幸一・九大大学院松永幸男の両氏には種々の協力を賜った。記して謝意を表したい。

(田中)

註

- (1) 正確には、充填構造である。
- (2) 竪穴内層序において上・下層出土土器に変化がないこと、出土土器様式が一様式もしくは近接した二様式またかっていることなどから、竪穴内層は比較的短期間に行なわれたものと考える。なお、6号溝からは出生式上器等後世の遺物も出土していることから、本項の分析対象からははずしている。
- (3) 山中良之「中期・阿高式系土器の研究」『古文化論叢』6, 1979
- (4) 森鶴一郎「繩文時代中期～後期の貯蔵穴の一例」『考古学ジャーナル』170, 1979
- (5) この個案は凹線文土器のみで算定し、四点文だけをもつ個体ははずしているが、四点文のタイプからみれば第17図4などを除いた大半が坂のI式に入るものと考える。また図示しえなかった細片はこの算定には入れていない。多くは滑石粉末を含んだ細片であるが、同程度の破片数を比較する方が実情に近いと考えたためである。
- (6) 註(3)と同じ。
- (7) 本遺跡の阿高式土器は移入品である可能性もあるが、そうでなくとも、本家坂の下I式とは形態を共有するものであり、相互の排他性は強くなく、一方の分布圏内で他方が製作されることもあるようである。ただ本遺跡のように比率は低い。
- (8) 森鶴一郎「坂の下遺跡の研究」『佐賀県立博物館調査研究』2, 1975
- (9) 前川威洋・木村幾多郎「天神山貝塚」1974
- (10) 小池史哲「糸島の繩文化」『三雲遺跡』II, 1981
- (11) 向其塚ともに1点のみの坂のI式精製土器が出土しているが、該類にそこで製作されたものなのか移入品か、あるいは先行する時期のものなのかは今のところ決め難い。しかし、いずれにしても少數である。
- (12) 山中良之「磨消繩文土器伝播のプロセス」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982
- (13) ただしこれはあくまでも「段階」であって、時期系を示すものではない。すなわち、伝播の段階を遺跡で示すと、阿高式系の優勢→劣勢化という観点からみて、坂の下遺跡→本遺跡→天神山貝塚・桑原貝塚となる。これは、坂の下遺跡が地理的に西に離れており、伝播の段階が時期的に遅れたことによるものと考える。
- (14) 註(2)と同じ。
- (15) 今のところ、北部九州における伝播のプロセスは明確にしがたい。遠賀川下流域の事情も今ひとつ不明確である。しかし、明らかなのは、北部九州における伝播は、中九州におけるような既存のコミュニティーション・システムを通じたものではなく、異なる土器文化・異なる集団の接触によるものということである。じつは、当方における中津式土器の多くは、精製から用製に至るまで、瀬戸内地方のそれと文様・技術的に変わることはない。このような点からみると、北部九州への中津式土器の伝播は、単に情報のみではなく、一定の人工作業者の移動を見込む必要があるだろう。

2. 中津式土器について

前節で述べられているように本遺跡の堅穴群出土土器は阿高式系が主体で、本遺跡では坂の下I式後半期～坂の下II式にかけて中津式が並行するが、北部九州の中津式を理解するために、瀬戸内地方の中津式を検討する必要があろう。そこで中津式とそれと関連する関東地方の称名寺式について若干の考察を行ないたい。なお、資料的制約のため精製深鉢を中心とする。

(a) 研究小史

中津式は、1933年に三森定男氏によって瀬戸内地方の後期初頭に位置づけられた。^①その後、鎌木義昌・木村幹夫氏、^②松崎寿和・間壁忠彦氏らによって、渦文や曲線的な文様を描く磨消縄文上器と沈線文土器、及びヘタナリによる条痕を有する無文土器がセットをなして中津式を構成し、その曲線が入組み化し、3本沈線化することによって福田K II式（後期前葉後半）が成立すると理解されている。その後、1970年代になって、中津式に類似する関東の後期初頭の称名寺式との関連で、①中津式の伝播によって称名寺式が成立、②称名寺式の伝播によって中津式が成立、③称名寺I式は加曾利E IV式の系統を引く土器群と中津I式の影響を受けた土器群から成る、という3つの見解が出されており、中津式・称名寺式の成立が問題となっている。そこで、まず関東地方～瀬戸内地方の中期後葉の様相を概観し、次に称名寺式・中津式について検討した上で、九州の中津式について触れたい。なお小稿では便宜上、中津式を東海地方以西の土器様式として論を進める。

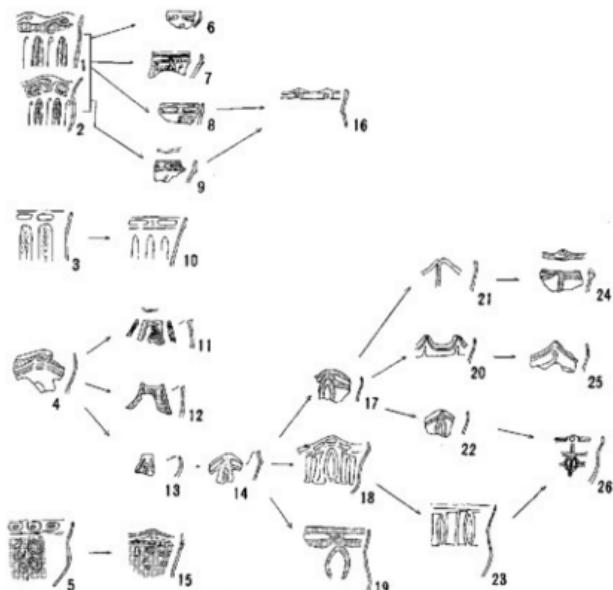
(b) 中期後葉の様相

関東地方から東海地方東部では、中期後葉～末にかけて、加曾利E II式→E III式→E IV式が存在するとされており、東海地方西部では細分が進んでいるが、文様等から判断して、ほぼ中富式・（啖烟式）・神明式を加曾利E II式併行、取組式・島崎III式・山の神式を広義の加曾利E III式と考えることができる。

ところで、東海地方西部～近畿地方にかけて、第1図6～13に示すような土器群が分布する。文様に着目すると、7・8は口縁部に棒状のモチーフを有し、胴部は長楕円文と蕨手文の組合せであることから、1・2との関連が窺える。6・9も7・8同様、口縁部に棒状のモチーフを有し、6の口縁部文様帶作出法（屈曲）が7と共通し、9の口縁部文様帶作出法（肥厚）が8と共通することから、6・9を7・8と同一群とみなせよう。10についても同様の理由で6～9と同一群とすることができ、文様論的には3との関連が知られる。この一群は三重県鈴鹿市東庄内B遺跡、愛知県知多郡南知多町林ノ峰貝塚、岐阜県忠那郡坂下町門垣戸遺跡、京都市京大農学部遺跡、鳥取市桂見遺跡などで出土している。

11～13は方柱状の山形口縁を有し、文様に着目すると、渦文・同心円文と棒状モチーフの組

合せであることから、これらを同一群とみなすことができ、文様論的には4との間に関連性が認められる。この一群は三重県東庄内B遺跡、岐阜県不破郡開ヶ原町中野遺跡⁶、揖斐郡都山村宮ヶ原遺跡⁷、京都府京大農学部遺跡、鳥取市桂見遺跡出土しておる、東海地方西部～近畿地方、



第1図

および鳥取県の東部まで分布し、既述の6～10の土器群の分布範囲とはほぼ一致する。

ところで、1～4は東海地方の島崎III式・山の神式に比定でき、既述したように広義の加曾利E III式と考えられることから、仮に7・8→1・2、10→3、11～13→4という方向性を想定すると、7・8・10・11～13は加曾利E II式併行ということになるが、加曾利E II式ないし、併行様式の器形・文様構成とは大きく異なることから、この方向性は想定し難い。一方、この両群を出土した三重県東庄内B遺跡では中津式は出土せず、東庄内A遺跡ではその逆の状況が見られることを考慮すると、これらを加曾利E III式に後続する中期末の土器群として把握できよう。

さて、14については、器形は異なるものの、文様論的には13→14という変化が窺える。さらに、14の口縁部文様帶作出法が6・7と共通することから同じく中期末に位置づけられ、15は文様論的には5（加曾利E III式併行の曾利式）の系統を引くと考えられるもので、口縁部文様帶作出法は異なるものの、口縁部モチーフの共通性から、同じく中期末に位置づけることができる。

以上述べてきたように、中期末に位置づけることのできる一群を「平式」とすると、いずれも加曾利E III式ないし、それに併行する曾利式の系統を引くもので、東海地方西部～近畿地方

に分布することが知られる。ところで、東瀬戸内地方～近畿地方では中期後葉に里木II式が主体的に分布するが、里木II式に先行する船元IV式に加曾利E II式の影響が認められるとされることから、里木II式を加曾利E III式併行と考えることができる。一方、里木II式から平式への型式変化は考え難いことから、加曾利E III式を祖形とする平式は東海地方西部で成立し、近畿地方へ伝播したものとみなせよう。また、東瀬戸内では里木II式の地文の燃糸文を貝殻条痕に置換した里木III式が中期終末に位置づけられているが、文様構成など、里木III式、および、西瀬戸内の中後葉～末に位置づけられる福田C式と後続の中津式との間に共通する要素がほとんど見られないものである。

さて今村啓爾氏は称名寺I式を、加曾利E IV式の系統を引く一群と、その系統を引かない一群とに分離し、前者をb類、後者をa類として、a類を中津式の影響によって成立したものと考えておられるが、上述のように、近畿以西で中津式が成立した可能性は小さい。そこで、称名寺式・中津式の検討を行ない、それを踏まえた上でその成立について考えたい。

(c) 中津式・称名寺式について

まず、中津式の主要文様要素の1つである0字文について検討する。（第ii図）

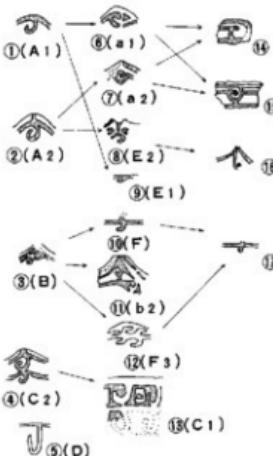
- 17 柿状のモチーフと0字文の組合せ
- 18 柿状のモチーフと0字文の組合せだが、口縁部文様と洞部文様が区別されている。
- 19 柿状のモチーフと下端が開いた0字文を組合



第ii図 註(6), (7)文献より転載

表ii

	関東	東海	近畿	瀬戸内 東・西	東～北九州
第I段階				○	
17				○	
18				○	
19		○			
第二段階					
22				○	
23				○	
20				○ ○	
21				○ ○	○



第iii図

わせたもの

20 「ハ」の字状の沈線間に突起状のモチーフを有するもの

21 20の突起状のモチーフがベルト状になっているもの

22 17に類似するが、棒状のモチーフが見られないもの

23 18に類似するが、棒状のモチーフが見られないもの

さて、20は17のネガティブな部分をポジティブな文様としていることから、 $17 \leftrightarrow 20$ という関係が想定でき、同様の理由で $17 \leftrightarrow 21$ も成り立つ。22と17の差違は棒状のモチーフの有無であることから、 $17 \leftrightarrow 22$

という関係が成立し、同様の理由で $18 \cdot 19 \leftrightarrow 23$ という関係を想定できよう。

ここで瀬戸内地方で中津式に後続する福HIK II式のモチーフ（24～26）との関連で考えると、 $20 \rightarrow 25$ 、 $22 \cdot 23 \rightarrow 26$ 、 $21 \rightarrow 24$ という関係を想定できることから、 $17 \rightarrow 20 \sim 22$ 、 $18 \cdot 19 \rightarrow 23$ という方向性が成り立つ。一方、口縁部文様帶を作出せず、棒状のモチーフで、口縁部文様帶を表現するという共通性から、 $17 \sim 19$ を同一段階とし、棒状モチーフをもたないという点で、 $20 \sim 23$ を同一段階とし得ることから、前者を第I段階、後者を第II段階としたい。なお、 $17 \sim 19$ は平式の14にその祖形を求めることが可能である。各モチーフの分布は表IIIに示すとおりであり、0字文はほぼ瀬戸内以西に分布するが、第I段階のモチーフは西瀬戸内にはみられないようである。

このようにみてくると、平式から中津式の0字文は成立するが、渦文は成立し得ないようであり、東瀬戸内の里木田式、西瀬戸内の福田C式を祖形として中津式が成立したとも考え難いことは既述したとおりである。よって、中津式の渦文が称名寺式の影響によって成立した可能性が大きくなることから、今村氏の称名寺I式a～b類について若干の検討を行ないたい。

（第II図1～15）

称名寺I式a類の文様を構成する要素は、J字文、渦文（1段・2段）、棒状文（縦に展開するもの・横に展開するもの）、ベルト状文などである。このうち、J字文と1段の渦文以外の要素は加曾利E IV式（12・14）には見られない。²⁴しかしながら、これらの要素は加曾利E IV式に先行するとされる加曾利E III式あるいは曾利III式（1・4・5・7・10）に認められるのである。まず2段渦文の1→2は明らかで、1のネガティブな文様部分をポジティブな文様としているのが3であることから1→3も成り立つ。6は4と5の要素を合わせもっていることか

表III

	開東	東海	近畿	瀬戸内 東・西	東～北九州	第II図1～5
第I段階	A ₁ ○×?		○			×
	A ₂ ○	○ ○ ○ ○				②
	B ○	○ ○ ○ ○	○			③
	C ₁	○ ○○○				④
	C ₂ ○					
	D ₁ ○					⑤
第II段階	D ₂ ○					
	D ₃ ○					
	a ₁ ○	○ ○				⑥
	a ₂	○ ○ ○ ○				⑦
	b ₂		○ ○ ○ ○			⑧
	c ₁ ○	○ ○ ○ ○				⑨
第III段階	E ₁ ○	○ ○ ○ ○				⑩
	E ₂	○ ○ ○ ○ ○ ○				⑪
	F ₁	○ ○ ○ ○				⑫
	F ₂	○ ○ ○ ○				⑬
	F ₃	○ ○ ○ ○				⑭
	F ₄	○ ○ ○ ○				⑮

ら、 $4 \rightarrow 5 \rightarrow 6$ が想定でき、7の棒状モチーフと渦文を結合すると、9のモチーフが成立すると考えられる。 $7 \rightarrow 8$ 、 $12 \rightarrow 14 \rightarrow 15$ は容易に理解できよう。なお、今村氏が加曾利E式系とされる11・13のような2段渦文も10の系統を引く可能性がある。

このようにみると、称名寺I式(a・b類)は関東で成立し、西日本へ伝播した可能性が強く、このことは、関東地方で中期の阿玉台式～加曾利E式期に盛行した土器片鍤、および加曾利E式期に關東地方にみられる切日石鍤A種が後期初頭に近畿地方(三重県東庄内A遺跡、京大農学部遺跡)に伝播したとする渡辺誠氏の指摘と矛盾するものではない。

次に、中津式の渦文を分析することによって、さらに検討を進めたい。ここでは、形状によって分類し、それと垂下の方法を組み合せることにする。

○形状

- A. 大形で巻き込みの大きい渦文
- B. 上下に展開する渦文
- C. Aと同様の渦文が縦に2段施されるもの
- D. J字文
- E. Aに比べると、巻き込みが小さく、鍵手状のもの
- F. Bと同様に上下に展開する鍵手状のもの

さらに、A、B、Cの繩文部と無文部を反転したものを各々a、b、cとする。

○垂下の状態

- 1. 口縁部から直接垂下する。
- 2. 渦文を沈線を用いて口縁端に結合する。
- 3. 口縁部付近を無文帶にして、その下に渦文を施す。

両者を組み合わせたものが第III図である。

さて、瀬戸内地方で中津式に後続するのは3本沈線の巾狭の磨消繩文帯を有する福田KII式であるが、瀬戸内西部には、2本沈線で巾広の磨消繩文帯を有する「宿毛式」が分布している。両者の関係については、中津式→宿毛式→福田KII式とする見解と両者を同時併存とする見解がある。宿毛式が主体を占める四国西南部に福田KII式が多くないことや広島県福山市洗谷貝塚における出土状況を考慮すると、宿毛式と福田KII式が併存したと考える方が妥当であろう。

以上のことを踏まえて、渦文と関連する福田KII式のモチーフを示したのが第III図⑪～⑯である。⑪・⑫は、①・②の繩文部と無文部を反転し、沈線を入組化したものとみなせる。よって、⑪・⑫は⑥・⑦を媒介として、①・②にその組形を求めることができよう。⑯は繩文部と無文部を反転することなく、ボティックな部分を維持して入組文化している。⑯の形状は③より⑯・⑯に類似し、⑩・⑪・⑫が考えられるが、③→⑯の可能性もある。ところで、③は波頂部を無文にするという点で、第II 図9(称名寺I式a類)の口縁部モチーフと共通し、その分布は

表iiiに示すように瀬戸内～関東地方に見られることから、相対的に古い段階に位置づけることができよう。よって、③→⑩・⑪→⑫が想定できるのであり、③の位置づけについては、古段階に位置づけられる②が同様に瀬戸内～関東地方に分布することと矛盾するものではない。さて③のポジとネガを反転することによって、⑪が成立することから③→⑪も想定できる。④についても、称名寺I式b類に類似し、関東～近畿地方に分布することから、古段階に位置づけることができ、ポジとネガの反転によって、④→⑬が想定できよう。⑧・⑨の形状は⑩・⑪に類似することから、⑧・⑨を⑩・⑪と同一段階に、⑤については、称名寺I式a類に類似し、関東～東海地方にかけて分布することから、古段階に位置づけることができよう。以上の事から、①～⑤を第1段階、⑥～⑬を第2段階のモチーフとみなす事ができ、その分布は表iiiに示すとおりである。表iiiから、第1段階のモチーフが瀬戸内～関東地方にかけて分布するものの、関東～東海地方を中心とし、第2段階では近畿～瀬戸内地方と東海地方以東で異なる様相を呈³¹していることが看取できよう。

ところで、瀬戸内地方では岡山県吉備郡昭和町日羽ケンギ³²、ウ田遺跡で、渦文の第1段階と0字文の第1段階が主体を占め、広島県福山市洗谷貝塚³³で、渦文の第2段階と0字文の第II段階が主体を占めることから、渦文の第1段階と0字文の第I段階、渦文の第2段階と0字文の第II段階は、各々ほぼ同時期と考えられる。さて、ここで既述したように渦文に関して、近畿地方を境にして、第2段階の様相が異なること、及び0字文の分布がほぼ瀬戸内地方に限られることから、関東～近畿地方と瀬戸内地方の間に差異が認められる。そこで、次に半精製土器、粗製土器について検討したい。

今村氏に依ると、称名寺I式a類には、繩文を縦に間隔をあけて加えた半精製土器が伴ない、また、称名寺式には櫛状施文具による条痕を有する粗製土器が伴なうという。前者は三重県鈴鹿市東庄内A・B遺跡³⁴、滋賀県大津市滋賀里遺跡³⁵、奈良県天理市布留遺跡³⁶、京都市京大農学部遺跡³⁷、大阪府馬場川遺跡³⁸0地点で出土している。後者は、二重県東庄内A・B遺跡、奈良県布留遺跡、鳥取市柱見遺跡³⁹などで出土している。これに対して瀬戸内地方の中津式に伴なう粗製土器は二枚貝・小巻貝による条痕を有する土器で、半精製土器も称名寺式のそれとは異なっている。このように精製・半精製・粗製の各レベルで、関東～近畿地方と瀬戸内地方以西の間に差違が見られることから、ここで改めて、関東～近畿地方では称名寺式、瀬戸内地方以西では中津式としたい。

そこで、瀬戸内地方における渦文の第1段階と0字文の第I段階を中津I式、渦文の第2段階と0字文の第II段階を中津II式とすると、その型式変化の特徴として、櫛状モチーフの消失、直線化、渦文の萎縮、櫛文部と無文部の反転などが挙げられよう。中津II式は福田K II式へと型式変化するが、京都府京大植物園内繩文遺跡⁴⁰では福田K II式・縁帯文土器・壺之内I・II式が併行することが確認されていることから、今村氏の称名寺I式c類・II式が中津II式に併行

ると考えられる。

称名寺I式の型式変化は、渦文の縄文部と無文部の反転を基本としているよう、中津I式の型式変化との間に共通性が認められるものの、既述したように称名寺I式c類・II式と中津II式のモチーフの差違は大きい。このことは、中津I式の成立段階に関東～東海地方に向って開いていたコミュニケーション・システムが、⁴⁷中津II式期にはある程度閉じ、一方、西に向って、より開いていたことが表iiiから窺えよう。また、福田KII式に縁帯文の影響がみられる（第1図26）ことから、福田KII式期のある段階には、再びコミュニケーション・システムが東に向ってある程度開いていたものと考えられる。

最後に北部九州の中津式について検討したい。

北部九州では福岡県糸島郡志摩町天神山貝塚⁴⁸、福岡市桑原飛櫛貝塚⁴⁹、福岡県鞍手郡鞍手町新延貝塚⁵⁰、本遺跡、佐賀県西松浦郡西有田町坂の下遺跡等で中津式が出土している。資料が断片的であるが、渦文の形状、文様の直線化が見られること等から判断して、ほぼ中津II式に比定できよう。一方、前節で述べられているように、北部九州の中津式は坂の下I式後半期から坂の下II式に伴うようである。

さて、天神山貝塚では中津II式の精製土器と小卷貝による条痕を有する粗製土器がセットをなすのに対し、阿高式系土器は半精製土器とされる凹点文土器と粗製土器であり、中津式の優位が看取できる。桑原飛櫛貝塚⁵¹、新延貝塚⁵²でも同様の状況である。一方、本遺跡でも中津II式の精製土器と粗製土器がセットをなしているが、主体を占めるのは阿高式系である。以上から、中津式の精製土器と粗製土器を出土しても、中津式が、a₁主体を占めない場合、a₂主体を占める場合があるようである。一方、地理的に西の方にある坂の下遺跡では中津式の精製土器が客体として存在している。異系統の中津II式が伝播した段階で、精製土器と粗製土器がセットをなしていることから、この伝播がある程度の人の移動を伴うものであったことが考えられ、先に述べたa₁、a₂は外来集団が在来集団に対して優位を占めて行く過程を示すものと言えるかもしれない。

この状況は既述したように、瀬戸内地方に称名寺I式(a+b類)が伝播した際の状況とは対照的であり、この現象の背景の究明などの問題は今後の課題としたい。

小稿を草するにあたり、以下に記す諸先生・諸氏にいろいろな御配慮、並びに貴重な御指導・御教示を賜った。末筆ながら深甚の謝意を表したい。（敬称略・五十音順）

岡崎敬、木村幾多郎、杉村幸一、田中良之、西健一郎、西谷正、松永幸男、宮内克己、

横山浩一 (1983.3.7.)

(沢下孝信)

註

- (1) 三森定男「先史時代の西部日本」『人類学・先史学講座』第8巻1933
(2) 錦木義昌・木村幹夫「中國地方の縄文式土器」『日本考古学講座』3 1956
(3) 松崎寿和・間壁忠意「縄文後期文化・西日本」『新版考古学講座』3 1969
(4) 安孫子昭二「縄文時代後期初頭の諸問題」『平尾遺跡調査報告』I 1971
(5) 下村克彦「大宮市北堀出土の称名寺式土器」『埼玉考古』12 1974
(6) 今村啓輔「称名寺式土器の研究(上・下)」『考古学雑誌』63-1,2 1977
(7) 小橋での加曾利E式の編年は鈴木保彦他「縄文時代中期後半の諸問題~土器資料集成図集『神奈川考古志』10 1980に従ふ。
(8) 紅村弘「縄文中期文化」『東海先史文化の諸段階一本文編・補足改訂版』1981
(9) 小玉道明「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」I 1970
00 山下豊「愛知県南知多町内海林・津貝塚遺跡調査報告」『古代学研究』77 1975
01 舟川引他「成田郡坂下町門垣戸遺跡調査報告書」1976
02 中村徹也「京都大学農業部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要」II 1975
03 小杉宗雄他「桂見遺跡発掘調査報告書」1978
04 大庭義一他「岐阜県史」(通史編原稿)1972
05 小沢弘「美濃國山田宮ケ原遺跡の縄文時代遺物」『古代文化』27-10 1975
06 註19に同じ
07 斎田直氏の平C式、平K1式を含む。斎田直「平遺跡」『帝塚山大学考古学研究室考古学シリーズ』1 1966
08 両壁忠彦「黒木貝塚」『倉敷考古館研究集報』7 1971によると「加曾利E式古段階」とされるが、EII式とみなせる。
09 註18 文獻
10 田中良之「新延貝塚の所属年代と地域相」『新延貝塚』1980
21 註6 文獻
22 16のチーフ自体は8~10に類似し、肥厚によって縄部又様帯が作出されていることからも、平式と考えられるが、岡山県ケンギョウ・ウ田遺跡で中津式に伴って出土したことから後期初頭に位置づけることができよう。間壁忠意「岡山県昭和町日羽ケンギョウ・ウ田遺跡」『倉敷考古館研究集報』3 1967
23 註6 文獻
24 今村氏は2段の渦文も加曾利E IV式の系統を引くとされているが、文様論的にはヒアタスが大きいようである。
25 文様論的には称名寺 I式は加曾利 E III・曾利III式と加曾利 E IV式の要素を含むことから加曾利 E III・曾利IV式と加曾利 E IV式が同時に併存した可能性があり、すでに堀越正行氏によって加曾利 E IV式を E II式に含める見解が出されている。しかしながら加曾利 E III式と E IV式を検討することは小橋の目的ではないので、今後の課題としておきたい。堀越正行「加曾利 E III式土器研究史」『岱漢』24-2,3,4 1972
26 波辺誠「縄文時代の漁業」1973
27 木村剛郎「高知県梅原の縄文遺跡と遺物」『上佐考古学講習』I 1978
28 田中良之・松永幸男「後期土器について」『萩谷地の遺跡』IV 1981
29 註27 文獻
30 福島市教育委員会「洗谷貝塚」1976
31 註6によると、称名寺 I式 a・b類→I式 c類への型式変化はボジ・ネガの反転であり、その点では近畿→瀬戸内における型式変化と共通するが、その結果、成立したチーフは近畿→瀬戸内地方に比べてグリエイションに富み、異なる様相を呈する。
32 註2 文獻
33 註4 文獻
34 註6 文獻
35 註9 文獻
36 田辺昭三「湖西線関係遺跡調査報告書」1973
37 小長波次「布留遺跡」「余長原史跡名勝天然記念物調査抄報」第10号1958
38 註2 文獻
39 下村晴生「馬場川遺跡発掘調査摘要」『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査摘要』IV 1976
40 註20に同じ
41 中村徹也「京都大学理学部ノート・イオトロン実験装置室新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要」1974
42 上野住也氏によると「上野型式圖は…上野文様の情報の流れにのって成立する」のであり、その流れを維持するものが婚網と交易ということになる。即ち土器分布図は、ある土器型式に関する情報の流れを共有しているヨシニケーション・システムと言えよう。上野住也「情報の流れとしての縄文土器型式の伝播」『民族学研究』44-4 1980
43 先に関東→近畿地方までは称名寺式としたが、表2のように中津II式が近畿地方にも存在することから、近畿地方では、称名寺 Ic・II式と中津II式が混在していたものと考えられる。
44 前川威洋・木村幾多郎「天神山貝塚」1974
45 小池史哲「糸島の縄文文化」『三重遺跡』II 1981
46 木村幾多郎他「新延貝塚」1980
47 斎第一郎「坂の下遺跡の研究」『佐賀県立博物館調査研究書』第2集 1975
48 註46 文獻
49 田中良之「中期・阿高式系土器の研究」『古文化論叢』6 1979
50 註5 文獻
51 註6 文獻
52 註47 文獻

3. 各時期の遺構について

第2・3章で少しふれたが、ここでもう一度まとめの意味もあってふれておくことにする。本遺跡では、旧石器時代の包含層の存在は確認したが、未掘のため遺構は確認できなかった。遺構を確認したのは、縄文時代後期初頭の竪穴、弥生時代前期から中期の溝状遺構・竪穴・住居址、古墳時代の住居址、古代の掘立柱建物・竪穴・溝状遺構などである。

全時期の遺構分布をみていくと、縄文時代の遺構は調査区西側に、弥生時代の遺構は、溝が調査区西側に、竪穴・住居址は調査区北東部に分布している。古墳時代の住居址は、調査区北東部と、南部に集中し、古代の遺構は調査区に分布している。以下、縄文時代の竪穴・古代の建物について考えてみる。

(a) 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構として確認したのは、竪穴50基（他の時期のものが2～3基あるか？）と第7号溝状遺構、第2号自然流路（川）である。これらの遺構は、調査区西部に分布している。

竪穴遺構は、北流すると考えられる第2号川に沿った形で弧状に分布し、第13号など5基、第3・4・10号など8基、第33～38号の5基、第12・14号など13基、第39～43号の5基、第45号など5基、第56号など3基の7ヶ所の集中区が見られる。ほとんどの竪穴は切り合い関係はもたないが、第12号竪穴と第23号など2基の切り合い関係をもつものが6ヶ所ある。

竪穴の形状は、第2号竪穴を除いてほぼ円形の平面プランをもち、精査した竪穴でみると、袋状を呈し、床面は平坦なものが多い。大きさは、径3mをこすものと、2m前後のもの、第13号のように1.5m前後で浅いものがある。深さは、残っている深さが1m前後のものと、1.5mをこすものがある。第4・9・10号の3基の竪穴の床面中央部には、柱が立っていたり、枕状のものが打ち込まれていた痕跡がみられ、屋構造があったとも考えられる。掘り込みは、第3・10号が八女粘土層の下の砂層（含水層）まで達しているが、他の竪穴は八女粘土層まで掘り込んでいる。

竪穴の性格は、精査した12基の中で、第2・13号以外の10基からはイチイガシ（堅果・以下イチイガシとする）が検出された。イチイガシの出土の状況は、第3・10号のように、最下層に多量（約30kg）出土したものと、第4号など8基のように、堆積土中ではなく、床面に斑点状にくい込んだ形で出土したものがある。ちなみにイチイガシは完熟大形が90%以上をしめているが、中には幼果で杯状の総苞を残しているものもある。この他には、タデの実なども入っているほか、第3・10号からは、バラ科植物のトゲなども出土した。以上から本遺跡の竪穴は、イチイガシを貯蔵した貯蔵穴といえる。

本竪穴の時期については、第2章2や第3章1・2でふれたように、中期末から後期初頭の時期の阿高式系・中津式系の土器期にあたる。前述したように、切り合い関係があること、第2号

川出土の土器の中には、中期末のものがあるところから、精査した堅穴の時期は、後期初頭に位置するが、未調査の堅穴の中には中期末に位置づけされるものもあると考えられる。

本遺跡では、堅穴のほかに第2号川、第7号溝状遺構（以下溝とする）がある。これらの遺構も、堅穴と同時期と考えられる。また第6号溝中には、突唇文土器と後期前半をうめるような土器が出土しており、今回の調査では確認できなかったが、今後本遺跡周辺地域の調査で後期から晩期の遺跡が検出されるだろう。

本遺跡で確認されたような植物種子の貯蔵穴は、前期以降全國的にみられるが、住居付設でなく単独の貯蔵穴は、中期末から後期にかけて増えるといえる。本遺跡のようにイチイガシを貯蔵するものは、本市西区飯盛遺跡がある。他地域では、山口県岩田遺跡などにドングリを貯蔵するものが多い。市内では、有田高畠遺跡でも貯蔵穴と考えられる堅穴が約50基検出されている。

（b）古代の掘立柱建物

古代の掘立柱建物（以下建物とする）は、24棟確認し、このほかに建物柱穴多数を確認した。第12号建物（以下遺構番号のみとする）は、1間×1間であるが、この地区に柱穴が少なく、東西・南北方向にも延びると考えられないので独立した建物とした。1間×1間は、調査区北東部では、5棟前後あるが、古墳時代の住居址群と切り合い関係をもっており、建物柱穴すべて確認できたとはいえない。ここでは建物の可能性はあるものの遺構番号はふしていない。

24棟の建物は、すべて第4号溝の東側に位置し、調査区北西部に集中している。また柱穴は、第4号溝の西側にあるが、まとまるものは確認できなかった。いずれにしても第1号柵列・第2号溝よりも西側に出ることはないと考えられる。

建物は、第1・6・18・15・22号が2間×2間のベタ柱で倉庫と考えられる。第7・10号を除く建物も桁行・梁行が正方形に近く、第9・16号のように建物中央部に柱穴をもつものがあることから倉庫と考えられる。

これらの建物は、桁行・梁行の方位からみていくと7群以上が考えられる。第2・12・21・16・17号の5棟は磁北方向の方位をもつもので、第2号溝も同一方位である。建物間の間隔は10m前後である。第1・6・10号はN-4°-Wの方位をもち、第20号・第9・11号溝はN-6.5°-Wの方位をもっていることから同一の建物群と考えられる。これらの建物間は5m前後である。第15号・第4号溝はN-9°-Wの方位をもち、この方位に前後する方位をもつ第3・13・19号が同一群と考えられる。第7号は、N-11.5°-Eの方位をもつ住居と考えられる建物で、第2号溝・1.5mの柱間をもつ柵列と同一群をなしている。これらの群は、時間的な差をもつと考えられるが、未掘のためわからない。

建物の時期は、未掘のため判然としない。

客土層上面には、12~13世紀の青白磁などが一面にみられること、建物柱穴の掘り込みが確

認できない。客土層をはずした直上に8世紀から9世紀の土師器・須恵器があり、この面で建物柱穴の掘り込みがみられる。建物柱穴は、すべての堅穴住居址を切っている。また第1号川は、6世紀後半から7世紀末に1.5m前後の深さをもち、客土層でおおわれている。第1・2・4・8～13号溝は直線的な流路をもつU字溝である。

以上から、本遺跡の建物群は、7世紀から9世紀の建物（倉庫）群と考えられる。下限は、12世紀までは下らないといえる。

本遺跡の建物は、古代の倉庫群であり、今後隣接地域で住居主体の建物群が検出されよう。

4. おわりに

本遺跡は、旧石器・縄文・弥生・古墳・歴史時代の複合遺跡で、調査では大きな成果を得た。

本遺跡の調査は、福岡市教育委員会文化課発足以来、はじめての盛土保存を前提とした発掘調査である。現在、市内をはじめ全国各地で盛土保存が行なわれており、残された遺跡も少なくない。現在行なわれている盛土保存には、周知の遺跡であるが、遺構の面に影響が考えられないことから調査を行なわず盛土するもの（T.事中発見もある）、試掘調査を行ない遺跡の性格範囲確認まで行なうもの、発掘調査（精査）を行なった後盛土して残すものなどがある。遺跡を破壊から守るという意味でやむをえないと考えられる。しかし、本遺跡などのように運動公園や道路など半永久的な構築物ができる場合は、必ずしも遺跡を残したとはいえないのではないかだろうか。盛土保存する場合は、少なくとも遺構の分布・性格・遺跡の範囲は、調査によって確認しておく必要があろう。

なお、第56号堅穴・第6号溝・第2号自然流路・表土層の出土遺物については、別紙に紹介したい。またイチイガシなどの種子については、大阪市立大学の粉川昭平氏に分析を依頼している。

図 版





野多目括渡遺跡周辺航空写真



野多目桔渡遺跡 第1次調査全景（上・南西から、中・南西から、下・西から）



縄文時代竖穴分布状況（上・北から、下・東から）



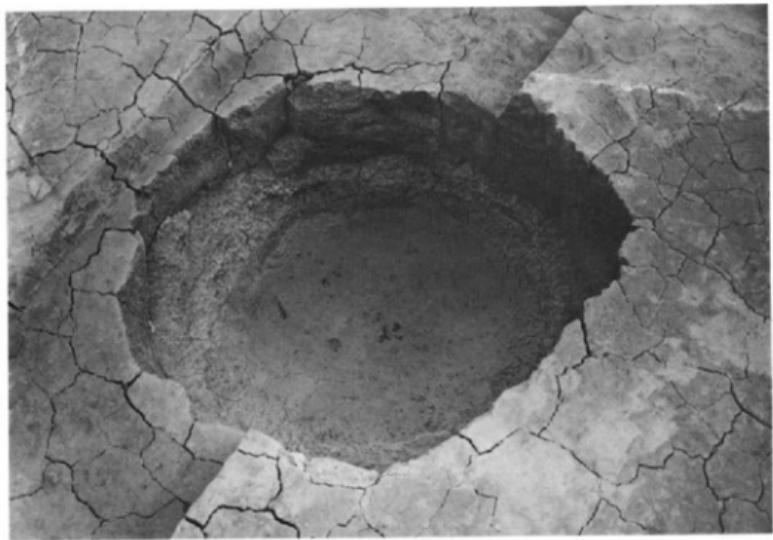
(1) 第7号竖穴断面



(2) 第10号竖穴



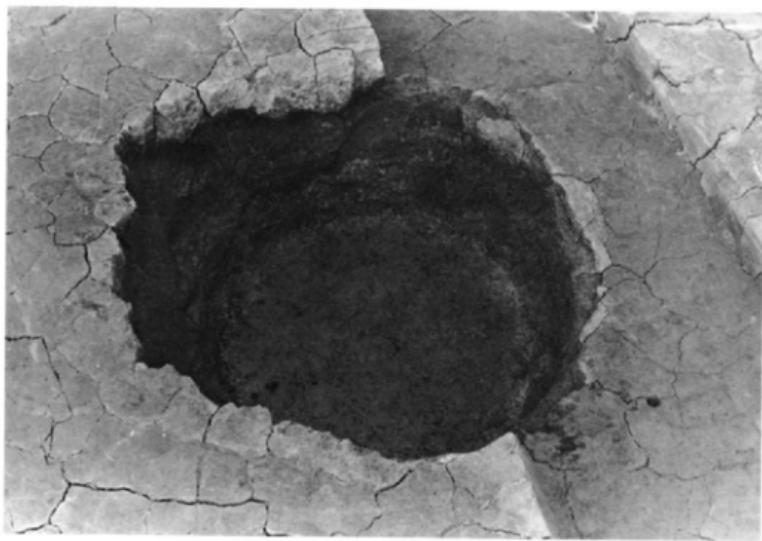
(1) 第11号堅穴土器出土状態



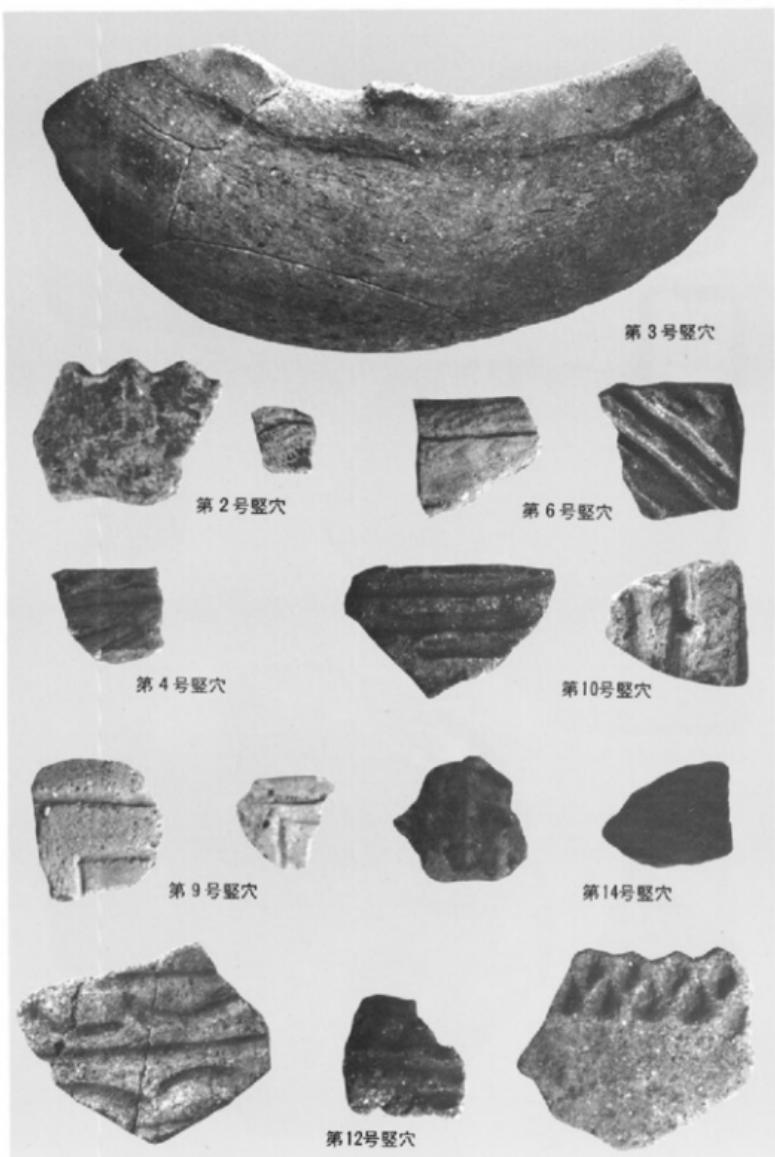
(2) 第11号堅穴



(1) 第12号竖穴断面



(2) 第12号竖穴



各竖穴出土土器



第11号竖穴出土土器





客土層及び表土層出土遺物



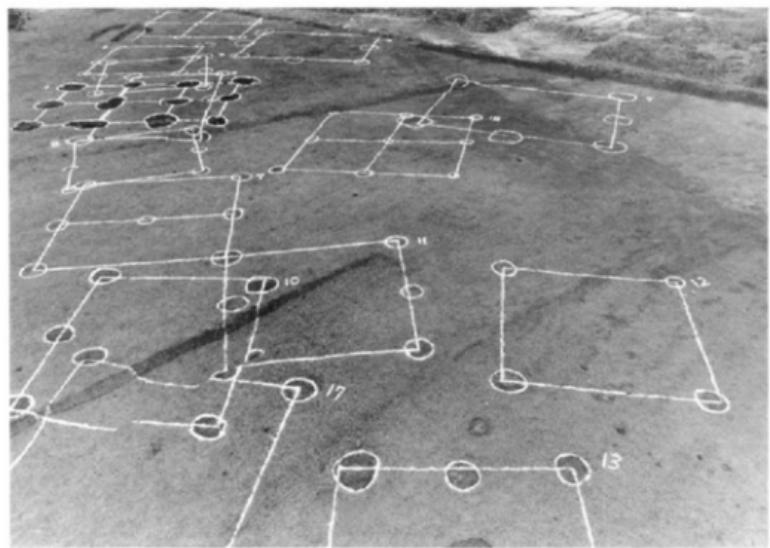
(1) 遺構分布状況（第2次調査）



(2) 住居址分布状況



(1) 墓構分布状況（第1次調査）

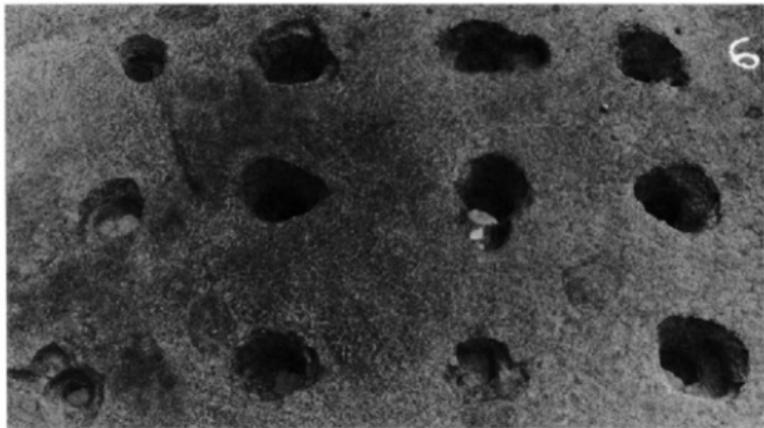




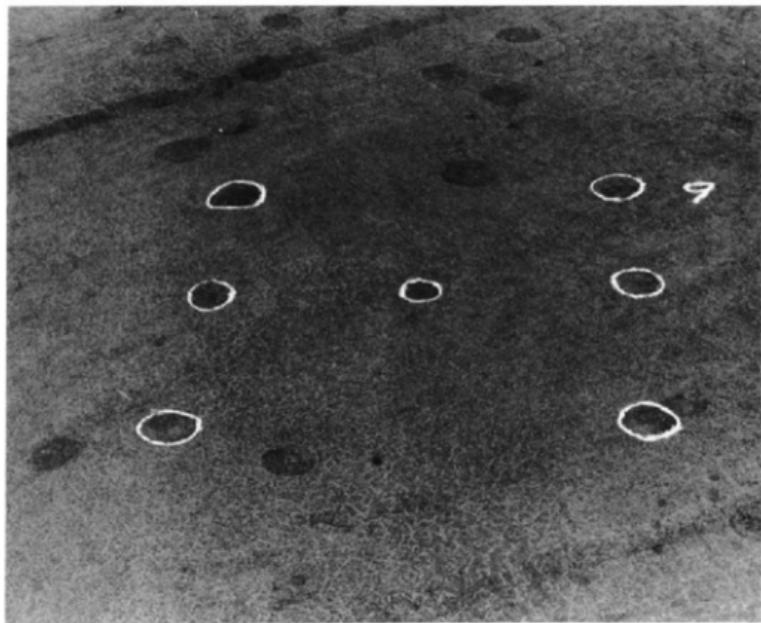
(1) 挖立柱建物分布状况



(2) 第 1 ~ 6 号挖立柱建物分布状况



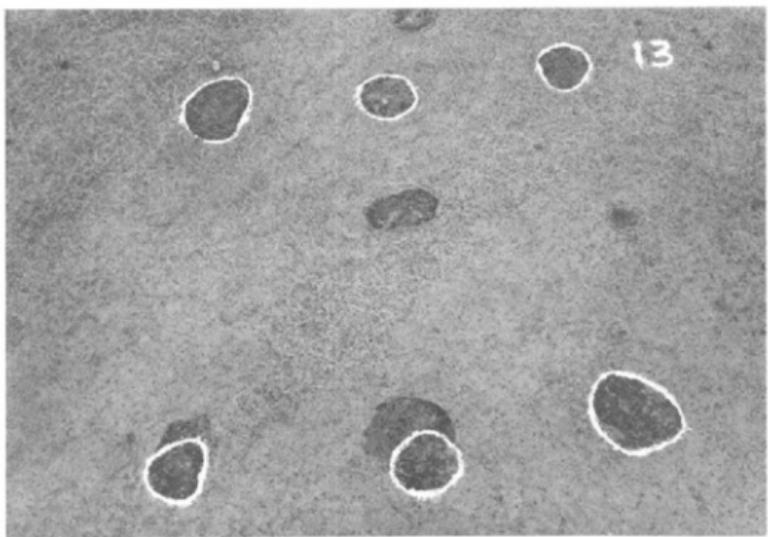
(1) 第6号掘立柱建物



(2) 第9号掘立柱建物



(1) 第10・12・13号掘立柱建物分布状況



(2) 第13号掘立柱建物



福岡市
野多目拈渡遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第93集

1983年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 織田エフ福岡工場

福岡市博多区東比恵2-9-1

福岡市

野多目括渡遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第93集

1983

福岡市教育委員会